

さばげーがえり！

一織

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

サバイバルゲームの帰り道の筈が気が付けば『がつこうぐらし!』の世界ヘトリップ!
!?

今までサバイバルゲームで使ってた銃とかは本物になってるし、これは彼女達を救え
という事なのか?

※この小説に登場する銃器は基本的に投稿者のサバゲチームが使ってる銃です。

登場するキャラクターもチームの人たちが元になってます。

補足説明

登場人物の弾薬についてコメントがあつたので

弾薬はサバゲの帰りに残っていたBB弾の数×銃の数

で彼らはサバゲ帰りに5000発入のBB弾が手付かずであったので各銃には5000発残りの弾薬があると言った計算です。

目次

第1章 巡ヶ丘学院高校

第1話	にちじょう	1
第2話	めぐりがおか	7
第3話	はじめまして	11
第4話	けいかく	16
第5話	しゅっぱつ	21
第6話	しよっぱんぐ	27
第7話	みんなで	37
第8話	いぞん	44
第9話	きずあと	50
第10話	ぶらつくおぷす	55
第11話	えくすたーみねーたーず	

63

第12話	かわらないばしょ	69
------	----------	----

閑話集

第13話	むこうがわ	88
第14話	くるみ替え人形	95
第15話	からおけ	103
第16話	くりすます	121
はつゆめ		131
救えなかった及び出せなかったキャラ		
あと、勝手に作ったキャラ		141
えいぷりるふーる		149
星に願いを		156
コラボ ゾンビ蔓延る学校をFPSプレ		

イヤーが被害を悪化させる話？

ゾンビ蔓延る学校をFPSプレイヤー

g:いいえ、これはさばげーがえりです

166

コラボ2話 ゾンビ蔓延る？さばげー

がえり!? 172

コラボ第3話 ゾンビ蔓延るさばげー

がえり 180

第2章 卒業旅行

第17話 そつぎようしき 188

第18話 たびだち 196

第19話 ま○どぐらし! 211

第20話 メインヒロインの4人中3

人が○ナニーするゲームがあるらしい

220

第21話 オ○ニーする女の子は可愛

いって言うお話 237

第22話 薬局といえぱツ○ハドラッ

グか薬○堂 242

第1章 巡ヶ丘学院高校

第1話 にちじょう

最近、学校が好きだ。

そう言うと、変だつて言われそう。でも考えてもみてほしい。学校つてすごいよ

物理実験室は変な機械がいっぱい

音楽室、綺麗な楽器と怖い肖像画放送室、学校中がステージ何でもあつて、まるでひとつの国みたい。

中でも私が好きなのは…

由紀「みんなー、おっはよー!」

胡桃「ん、おはよう」

悠里「おはよう、ゆきちゃん」

凜音「ん、おはよう由紀」

薫男「よう」

卓「おっはー」

ヒワインド「おはよう」

慈「ゆきちゃん、おはよう。今日はちよつとお寝坊さんね」

由紀「いやあ、それ程でも…」

薫男「褒められてないぞー」

由紀「もう、ゆつきーは朝から厳しいなあ、それにしても本当に銃が好きなんだねえ」

薫男「まあな、少なくとも勉強よりは好きだ」

凜音「薫男：．．？勉強もしような？弾道計算は数学だぞ」

悠里「もう、みんなご飯出来るわよ？」

薫男「りーさんナイス！」

卓「見事に逃げたなー」

慈「あはは．．．」

凜音「悠里、何か手伝う？」

悠里「あら、ありがとう凜音さん。」

凜音「おーい、薫男も手伝ってくれー皿多いんだから」
薫男「了解。」

胡桃「あたしも手伝おっかな…」
少年少女準備中…

全員「いただきます！」

由紀「もきゅもきゅ」

胡桃「おい、由紀もうちよつと味わってくえよ」

由紀「ん？」

胡桃「ほれ、凜音を見てみろ」

凜音「美味しいい…」。 (・▽・)。 パアアア

悠里「ゆきちちゃん、ご飯は良く噛んで食べてね」

由紀「ら、らじゃ！」

由紀「…美味しい。 (・▽・)。 パアアア」

薫男「そこは真似せんでいい」

由紀「ええええ」

凜音「よくかんで食べてくれるならいつか」

慈「じゃあ、ご飯食べたら授業しましょうか」

ヒワインド「そうだな、薫男も一緒に」

薫男「フアツ!?!」

悠里「そうねえ、この間数学解らないって言ってたしね」

卓「そうだねー、そういうえ言ってたね」

胡桃「はっはっはw」

薫男「ぐぬぬ…仕方ない…由紀と勉強は避けられないか…」

少年少女片付け中…

慈「じゃあ、行ってくるわね」

由紀「いってきまーす!」

薫男「行ってくるわー」

ヒワインド「いってくるー」

一同「行ってらっしゃい」ノシ

凜音「…さて、俺たちも行くか」

卓「そうだね…」

悠里「2人共、気をつけてね…。」

凜音「うん」

凜音はレッグホルスターからロングマガジンを装備したハイキャパシティガバメントを抜く

凜音「卓くんは左を、俺は右のを仕留めるから」

卓「了解」

凜音は『ヤツら』の頭部に狙いを定め、迷うこと無くトリガーを引く

その隣で同じ様に卓もGLOCK26のトリガーを引き、『ヤツら』を無力化する。

卓「銃声につられて集まってきたね…。」

凜音「まあ、だろうね。」

口では会話しながらも、緩慢な『ヤツら』の頭部に狙いを定め、的確に仕留めていく。

卓「リロード」

凜音「カバー」

卓がりロードしている間凜音は狙いを頭から外し、

より多くの『ヤツら』の足止めに切り換える

卓「Ok」

リロードが終わるまでの約20秒で凜音は『ヤツら』を残り5体まで処理していた卓「これで、ラスト」

卓が最後の1体を仕留め、2階の半分を制圧したところで

凜音&卓「ただいまー」

悠里「おかえりなさい、2人共」

凜音「あれ、薫男達は？」

胡桃「まだ補習だつてさ」

卓「マジか・・・」

一方そのころ勉強組

慈「はい、それじゃあ、2人とも三平方の定理についてわかるかしら？」

薫男&由紀「はい！わかりません！」

ヒワインド「コ☆レ☆ハ☆ヒ☆ド☆イ」

おしまい

第2話 めぐりがおか

掛名沢かけなざわ 凜音りおん

身長168cm 体重55kg 利き手 左(射撃時は右) 年齢 18
使用する銃

krebs Tactical Rifle 03

ハイキャパシテイガバメント

M870 MCS ソードオフ

性格 がっこうぐらし!の世界を知っていたからこそではあるが自分よりも他人を
優先しがちであり、悠里と依存関係になりつつある。

白水しらみず 薫男ゆきお

身長175cm 体重78kg 利き手 右 年齢 20

使用する銃

アツチソン Assault 12

ハイキャパシテイガバメント

レミントンM700

性格 基本的には脳筋だが冷静に物事を分析でき、危険になればすぐに退くことが出来る。

ヒワインドIIアイエフ

身長170cm 体重60kg 利き手 左 年齢 23

使用する銃

M60

FN 5-7

性格 この4人の中で唯一と言つていいレベルの常識人である。凜音同様にかっこ
うぐらし!の世界を知っていたからこそ、めぐねえの救出に最も力を入れていた
春日生^{かすがせい}卓^{すぐる}

身長169cm 体重53kg 利き手 右 年齢 26

使用する銃

H&K416C

GLOCK17

GLOCK26

性格 基本的にはおっとりとしていて自ら争いを起こすタイプではない。

その日は、フィールド開場3周年記念のサバイバルゲームの帰りだった

凜音「いやー、薫男のあの不幸は酷くない？」

薫男「俺もそう思う…。」

卓「A A 1 2 二丁持ちでスタートして5秒後にヒットとか…。」

ヒワインド「あれは、本当に酷かった」

薫男「まあ、良いよM700で結構キル取れたし、ところであの標識に書いてある地名なんて読むんだ？」

凜音「ん？めぐりがおかじゃないの？」

何気なく凜音は答えるが、この時点で凜音もヒワインドも気付くことはできなかつた。巡ヶ丘が、『がっこうぐらし！』の世界だと…。

最初の異変に気づいたのは凜音だった

凜音「あれ？スマホおかしくなったかな？とつくに17時は過ぎてるはずなのに時計が15時を指してる…。」

薫男「つか、やたらとパトカーと救急車多いな」

ヒワインド「なんだろう、事故かなあ？」

卓「ごめん！みんな！急ブレーキ踏む！」

3人「おおう!?!」

凜音「なにをしたの？」

卓「あつぶな、車が赤信号なのに突っ込んできた」

ヒワインド「え」

薫男「お、おい凜音……」

凜音「嘘……だろ!?!」

これじゃあまるでバイオハザードじゃないか、そう凜音は口を開きかけ、巡ヶ丘は『がっごうぐらし!』の舞台だったと思ひ出す。

凜音「マジかよ……」

凜音が手元のハイキャパシティとトランクの銃を確認してみると、サバゲーで使っていた銃は全て、本物の銃になっていた

卓「とりあえず、安全な場所に！」

薫男「じゃあ、高校に向かおう！高校ならそこが避難所になってるはずだ」

卓「了解！」

第3話 はじめまして

ヒワインド「高校もか……っ」

ヒワインドが唇を噛む

『ヤツら』『ヴアアアアアア!』

薫男「凜音ッ!」

凜音「くっそ……」

凜音はそう言い、ハイキャパシティの引き金を引き、『ヤツら』の頭を砕く

卓「凜音、大丈夫?」

凜音「…… 大丈夫、噛まれてはいない」

卓「じゃあ、駐車場まで校庭を突っ切るよ!」

そう言うと、卓はアクセルを踏み込み、速度をあげ、『ヤツら』を振り切る。

ヒワインド「薫男、AA12だ、使えるな?」

薫男「ああ、こんな所でくたばれねえしな!行くぞ!」

作戦はこうだ、車のドアを開けると同時に薫男がAA12で寄ってくる『ヤツら』を

蹴散らし、進路を開き、校舎内までヒワインドと走り抜ける

凜音は k r e b s t a c t i c a l r i f l e 03で薫男が仕留め損なつた『ヤツら』を始末しつつ卓と共に前進し屋上へ続く階段までダツシユ

凜音「ツ……!!?」

薫男「凜音! もうそいつは手遅れだ諦めろ」

凜音「……分かつてる」

凜音は校舎内を疾走しながら強烈な吐き気に襲われていた。

それは凜音だけでなくヒワインドも卓も薫男もだったが

なんとか屋上の階段前まで辿り着いた

凜音「誰かいるんでしよう! 開けてください! 感染はしていません!」凜音がドアを

叩くと

がチャリ

慈「貴方達何者なの!?!」

薫男「今はそれより鍵閉めて! すぐにヤツらが来る!」

慈「え、ええ解つたわ……」

凜音「助かりました……」

慈「生き残つたのは……」

凜音「…… すいません、俺たちの力不足で…… 助けられませんでした……」
慈「良いのよ、貴方達を責めているわけじゃ無いの、でも名前は教えてくれるかしら？」

凜音「あ、すいません。俺は掛名沢凜音と言います」

ヒワインド「ヒワインドⅡアイエフです」

薫男「白水薫男といます」

卓「春日生卓です」

慈「私は佐倉慈よ」

由紀「めぐねえ…… これからどうするの……？この人たちは？」

由紀は不安そうに慈に問いかける

慈「大丈夫よ、由紀ちゃんこの人たちが私たちを助けてくれるって。」

由紀「本当……！」

慈「ええ、本当よ。」

慈は笑顔で由紀に応える

胡桃「あのっ！ちよつと良いか？」

すると、胡桃が突然口を開く

凜音「ん？えーつと、ツインテールの子どうしたんだい？」

胡桃「あのさ、あんた達何者なんだ？自衛隊や警察じゃあ無いようだけど。」

凜音「……俺たちがこの世界の人間じゃないと言つて、信じるかい？」

胡桃「えっ……それは……」

凜音「それ位、自分たちでも訳が分からないことになってるんだ。今はそんな事よりも、ただ君たちの力になって、皆でこの世界で生き抜く。それじゃあダメかい？」

そう言うと凜音は微笑み

凜音「君たちの名前も教えてくれるかい？」

胡桃「あたしは恵飛須沢胡桃って言うんだ」

悠里「わ、私は若狭悠里よ」

由紀「丈槍由紀だよっ！」

薫男「もう良いか、凜音」

薫男が凜音に声をかける

凜音「うん、じゃあ、みんな今から俺たちは3階を確保しに行くから、此処で待つてね」

胡桃「まだ出会って間もないけど、絶対に死なないでくれよ……あんた達にいられたら何だか嫌なんだ……」

悠里「私も同じ気持ちですから」

由紀「絶対に戻ってきてね…。」

慈「絶対に危なくなったら戻ってきて下さいね。貴方達が私たちの希望ですから…。」
一同「了解！」

第4話 けいかく

凜音「うーむ…」

凜音は食料の備蓄を見て唸っていた

薫男「お、凜音どうした」

凜音「流石に8人も学園生活部が居ると食料の減りが…」

いつの間に学園生活部を立ち上げたのかとか突っ込まないでほしい。実は3階を制圧して、生徒会室と資料室を確保して屋上に戻ったところでめぐねえに提案されたのだ

回想

慈「部活を始めるの！」

悠里「それで、名前なんだけど…」

薫男「sns部？」

凜音「薫男、そのボケ伝わる人居ないし、多分同人ゲーム作る部活だよそれ」

由紀「学校で寝泊りする部活！その名も」

由紀&胡桃&悠里&慈「学園生活部！」

回想終わり

凜音「という訳で食料の備蓄を確認してたんだが、足りなくて」

慈「じゃあ、また購買部に？」

悠里「でも、購買部も持ってくるもの無くなって来たんじゃない？」

ヒワインド「そうなんだよー」

胡桃「じゃあ、どうするんだ？」

それは……と凜音が口を開こうとした時である

由紀「ねえ皆、シヨッピングモール行こうよ！」

慈「あら、由紀ちゃん、でもシヨッピングモールに行くってなるとだいぶ遠いわよ？」

卓「俺たち、車持ってますよ。」

そう、実は卓たちはサバゲの帰りだったため比較的荷物を積めるStreamで来ていた

慈「因みに運転免許持ってる方は？」

薫男ノ 凜音ノ ヒワインドノ 卓ノ

慈「みんな持つてる！」

凜音「という訳で、車を取りに行く人を決めたいと思います。」

凜音が生徒会室のホワイトボードに文字を書いていく

屋上からの狙撃班

有効射程距離が長く、連射可能なM60を持つヒワインド

M700を実はこっそり車から取ってきていた薫男

車を取りに走る班

M870 MCS ソードオフとハイキャパシテイ装備の凜音

H&K416CとGLOCK17装備の卓だ

凜音「えーつと、めぐねえの車の鍵を預かりますね」

慈「ちよちよ、ついに凜音くんまでその呼び方なの!？」

凜音「だって、慈さんって他人行儀じゃあないですか」

ヒワインド「そうだよ、めぐねえ」

慈「うう：． ヒワインドくんが言うなら：．：／／／」

薫男（照れてるな） 卓（照れてるね）

凜音「じゃあ、行ってきます。信頼してるよ、薫男」

薫男「任しとけ、魔弾の薫男にな！」

卓「被弾のユキオAA」

胡桃「（。 艸。）。：ブツ」

薫男「その呼び方いっつも思うけど何なん!？」

こうして出撃前の緊張が少しほぐれた一同であった

凜音「さてと」

チエストリグを装備し、レッグホルスターに自分の相棒であるハイキャパシテイを入れ、M870を手取る

M870 MCSソードオフの装弾数は3発、銃に装備しているチューブは6本

実質3回フルバーストしたら終わりだ、まあStreamの中にまだ予備が大量にあるが……

悠里「あ、凜音……あのね／＼／」

凜音「ん？悠里どうしたの？」

悠里「えいっ！」

悠里は凜音に抱きつき、強引に唇を奪う

凜音「んっ……!？」

悠里「んっ……はぁ……ん……♡」

悠里「大好きよ！」

凜音「俺も愛してるよ、悠里」

そう言うのと、凜音は悠里を抱きしめ

凜音「卓くん、お待たせ。」

卓「いやー、甘々だね」

悠里「? (? ? ? ω ? ? ?) ? テレ」

由紀「りーさんがりーくんとちゅーしてた！」

悠里「ゆ、由紀ちゃん!?! / /」

慈「あらあら、青春ねえ」

凜音「おうふ…まさかめぐねえにまで見られてるとは…」

ヒワインド「その位にして、遠足にG o だ」

一同「おー！」

第5話 しゅっぱつ

凜音「よいい……」

凜音&卓「どん！」

凜音と卓は梯子から降り、同時に走り出す

ゾンビA「ヴァアアア！」

トラックにいたゾンビが2人の横から現れるが
パァン！

乾いた破裂音と共に頭が吹き飛び地に伏す

薫男「enemy down」

ヒワインド「good kill」

ヒワインドはそう言いながら、M60で近くのゾンビを掃射する

凜音「この先駐車場に入るよ！」凜音は無線で薫男とヒワインドに伝える

薫男「了解。これより由紀達の援護に向かう」

胡桃「よっ……と！」胡桃はシャベルで2階で立ち塞がったゾンビの首を撥ね飛ばす

由紀「…… 胡桃ちゃんつて……」

胡桃「な、なんだよ由紀…」

由紀「脳筋だねっ☆」

胡桃「…ほあっちよう！」

見事に胡桃のチョップが由紀のつむじに直撃する

由紀「あうう…」

悠里「あらあら…」

慈「もう、もう少し緊張感を…」

ゾンビ「ガアアアアアア！」

胡桃「っ!?!めぐねえ！」

胡桃がそう叫ぶがシャベルではとても間に合わない。そう思い青ざめた時である。

ヒワインド「めぐねええええ！」

ドドドドド!

ゾンビ「グギヤアアア!?!」

ゾンビが一瞬ヒワインドの声に気を取られた刹那、その体が弾け飛ぶ

ヒワインド「ま、間に合った…」

そう、ヒワインドが自分の腕を痛めることを承知でゾンビにM60をフルオートで連

射したのだ

慈「あ… ヒワインド… くん…？」

薫男「ヒワインド！間に合ったか！」

そこにM700からAA12に持ち替えた薫男が来た

由紀「ゆっきー！」

薫男「おう、正義のヒーロー白水薫男此処に見参つてな」

ヒワインド「後は凜音と卓さんを信じて待とう」

凜音「ちい…」

凜音は舌打ちをすると、今まで胸に付けていたM870を構え、ゾンビに発砲する
M870の薬室に入ったゲージは残り2つだ

しかし、慈の車まで行くには少なくとも後6体のゾンビを始末しなくてはいけない。

凜音「ふうー…」

凜音は一旦昂った思考をクールにする為深呼吸をすると

即座にM870を戻し、レッグホルスターのハイキャパシテイを抜き、射線上のゾンビを1体ずつ処理する。

無駄弾を使わず、冷静に確実に6発以内で残りのゾンビを仕留めるため

まず凜音は銃を撃つ前に石を投げつける

そしてまんまと2体が“直線”に歩いてくる

凜音「… 馬鹿めと言つて差し上げますわ。なんて」

とあるキャラの台詞を呟きながら1発の弾丸で2体のゾンビの頭を撃ち抜く。残り
は4体。先程の発砲音に誘き寄せられるように右側から3体左側から1体現れる。

凜音「… 動くのかな？」

そう言い放ち冷静に残りのゾンビを仕留める

凜音「お、あつた！ 赤いミニクーパーS」

そう、実はめぐねえの愛車は赤のミニクーパーSなのだ。自分でメンテナンスとか出
来るのだろうか？

車に乗り込み鍵を回し、エンジンをかける。

AT車なのでMT免許取得の凜音からすればアクセルを踏みさえすれば前に進む車
などゴーカート同然だ

悠里「… 凜音…」

悠里がそう呟くとほぼ同時に目の前に赤いミニクーパーSが停車する

凜音「お また せ」

ヒワインド「乗り込めー^^」

慈「わあい(o^o^o)」

悠里「!? キャラ崩壊ってレベルじゃないくらいめぐねえがノリノリ!?」

悠里が驚愕している間に2人は後部座席に乗り込む

凜音「ごめん悠里、待たせたね」

悠里「いいえ、大丈夫よ、それより卓さんたちは？」

悠里が心配そうに運転席の凜音に尋ねると

凜音「すぐ後ろ」

卓「やあ、」

胡桃「待つてました！」

由紀「プレジデントマン！」

薫男「由紀、そっちの待つてましたじゃねーから！」

わいわいとStreamに乗り込んでいる

悠里「……大丈夫そうね」

こうして無事に学校からショッピングモールに向かう学園生活部一行であった

一方ショッピングモール

「???」
「くっそう……あの2人め……まさかドクペを取ってきて飲ませたらハマるなんて……まあいいや。今日も元気にあの2人の為に物資調達しマスカット！」

圭「ねえ美紀、今度はなんの本読んでるの？」

美紀「えつとね……話題になってた外国の作家さんの小説の原本版だよ、翻訳版は暗

記する位読んじやったから、なんとか読めるかもって」

圭「へえー、すつごーい！私英語聞くのは得意なんだけど読むのは苦手なんだよねー」

美紀「でも、圭もすごいよ、私は聞き取る方が苦手かな…」

圭「…ねえ美紀、今日はジョン何持つてきてくれるかな？」

美紀「うーん… そうだなあ… 足りないものと言ったら食料だけど、そこまで危ない所まで行つて大丈夫かなあ…」

圭「そうだよねー… 一つもありがたいんだけど、ちよつと危なっかしくて怖いんだよねー」

美紀「でもジョンならなんだかんだ服のついでーとか言つて持つて帰つてきそう」

圭「何だかそれ説得力あるー（笑）」

美紀「でしょ？ふふ、早く戻つてこないかなー？」

圭「もう、すっかり美紀はジョンにべつたりだね！」

美紀「わわわわ！… そう言う圭だつてそうじゃない！」

圭「あはは… そうだね、私ねジョンと出会えて良かった。」

美紀「私も、そう思う」

ジョン「ぶえつくしよん！あー… なんか誰かが俺の噂でもしてんのか？ま、いっかさつさと服とついでに本とドウクペにカロリーメイトでも持つて2人の所に帰ろ」

第6話 しょっぴんぐ

慈「えんそく〜♪」

ヒワインド「えんそく〜♪」

2人「楽しいえんそく〜♪」

ヒワインド「めぐねえ！めぐねえはおやつに入りますか!？」

慈「入りません！」

悠里「どつちかというと夜のおかゝ凜音「悠里、それ以上いけない」

やたらとテンションが高いめぐねえとヒワインドをよそに凜音と悠里はちよつと頭を抱えていた。

そうその原因は言うまでもなくヒワインドとめぐねえだ

久しぶりのショッピングモールということで2人のテンションがおかしいことになつていて同じ車に乗っている凜音と悠里の胃に穴が開きそうになつていたのである

気分はまるでアニメ版の由紀が2人に増えた気分だ

まあ、2人ともちゃんと現実が見えているという点では少し違うが

凜音「ショッピングモールに着いたら多分だがゾンビがわんさかいそうだから、2人

とも静かにね」

ヒワインド「分かってる」

慈「分かってるわ」

凜音「・・・なら良いや」

当然の如く演技だったらしい

一方Stream組

薫男「漢、漢、漢が燃える！」

由紀「それが定めよ！」

2人「漢！」

胡桃「由紀になんて歌覚えさせてんだお前！」

卓「ふっ・・・（笑）」

由紀「えー・・・いい歌なのにー、胡桃ちゃんも解ってないなー」

卓「じゃあ胡桃ちゃんはどんな歌聞くの？」

胡桃「うええっ!? えつと・・・あたしはその・・・ラブソング・・・とか・・・
／／／（顔

真っ赤）

由紀「胡桃ちゃんかわいい！」

胡桃「ううう・・・うるさい！」

薫男「かわいいよ（バリトンボイス）」

卓「かわいい（イケボ）」

胡桃「あ、あう……うう……うあああ!? イケボとバリトンボイスで言うなあ! 耳があ

! 耳が幸せになるう!」

と言った感じで車は順調にショッピングモールに進んでいった。

一方ショッピングモール組

ジョン「ただいまー」

2人「おかえりなさい」

圭「今日は何を持ってきたの?」

ジョン「ふっふっふっ（ΦΦΦ）聞いて驚け……なんとポップコーン製造器を持ってきたぞ!」

美紀「え」圭「え」

ジョン「え、そんなに驚いてない……?」

美紀「驚き過ぎて声にならなかつただけだよ……ね、圭?」

圭「う、うん。そうだよ! もうすつごいびっくりしたんだから」

ジョン「? そうか、後は着替えと、着替えと、カロリーメイトと、ドウクペだ!」

カン☆コーン!

圭「何!? ドクペ!」

美紀「やった! ドクペだ!」

ジョン「お、おうそんなにはまったのか: Dr Pepper」

因みに Dr Pepper とは日本ではかなりマイナーな炭酸飲料で、その薬っぽい風味+果実系の味で好き嫌いが両極端に別れる↑(気になった人は是非調べてみよう!)

学園生活部 side

由紀「到着く!」

胡桃「おい由紀あんまり大きな声は...」

由紀「大丈夫、分かってるよ胡桃ちゃん。(小声)」

胡桃「そつか。なら良かった」

薫男「うーむ... 迷子になりそう...」

凜音「まつさかー、ジョンじゃああるまいし(笑)」

凜音がハハハと笑う

悠里「そういえば、度々凜音の口から聞くけど、ジョンって誰?」

凜音「俺の戦友」

卓「ヤンデレに好かれる異常体質」

ヒワインド「猫耳パーカー着た変人」

薫男「バカ」

慈「まともに聞こえるのが凜音くんの評価だけね……（苦笑）」

薫男「んで、どうするんだ？正直此処は来たことないから全く分からぬ」

悠里「館内マップが落ちてるわ……」

館内マップを読み取ると、このショッピングモールはB1Fから5Fまでの6階層建てで、B1Fが食品売り場まず第一目標はここだろう、だが生鮮食品も扱っているらしく、推察だが、腐乱臭にヤツらの数が多いだろう、1Fがフードコート兼広場、2Fはアクセサリー類で俺たちには無縁、3Fは女性服、子供服コーナー、女性陣は此処に行きたがるだろう。4Fは紳士服コーナー。ファッションに興味は無いが、下着や替えの動きやすい服装は必要だろう。ここも行くことになりそうだ。そして何より5F此処は電化製品に寝具、本のコーナーと来た。此処は確実に行くことになりそうだ。

薫男「うーむ……」

ヒワインド「……電化製品……っは！」

薫男「どうしたヒワインド！」

ヒワインド「ゲーム機を手に入れるチャンス！」

薫男「なん…だと…!？」

悠里「2人ともー？最初は食料品よ？」

2人「はーい（わ・わ・わ）」

凜音「1階は広場にフードコートだからか開けているな…」

薫男「こういつた場所での戦闘は何度もシミュレーションした。任しとけ」

ヒワインド「それが良さそうだ。」

薫男「全員5m間隔でツーマンセル行動。言うなればVIP護衛だ。」

凜音&卓&ヒワインド「yes, sir。」

ツーマンセルは薫男&由紀、卓&胡桃

ヒワインド&めぐねえ、凜音&悠里。となった。

最初は

薫男「まずチーム分けは…」などと仕切ろうとしていたが…

悠里が凜音にびったり

薫男「そこはそれでいいや。後…」

由紀、薫男の袖の所を掴む

薫男「俺が由紀とで…」

ヒワインド、めぐねえとニコニコ

薫男「もう決まってたわ……」

薫男「最初はB1Fに向かう、凜音、ヒワインドでエレベーター上警戒、俺、卓くん
で下警戒」

薫男はAA12を構えながら、フラッシュライト代わりに懐中電灯で辺りを照らす。

薫男「直下クリア」

凜音「直上クリア」

薫男「move！」

薫男「俺、卓くんチームで缶詰め及びパン類を、凜音、ヒワインドチームで袋麺や米
類を確保その後 α 地点で集合、何か有れば無線で連絡。」

一同「yes, sir.」

凜音 side

凜音「米は少し重めになるな…… 30kgを持っていきたいが…… 台車かカートが有
れば……」

ヒワインド「俺たちで搜索する。何かあったら連絡を」

凜音「了解。無茶はしないように」

悠里「ねえ、」

凜音「ん？どうしたの悠里？」

悠里「他に誰か生きてる人居るのかしら……？」

凜音「……わからないかな、でもきつとどこかで必死に生きている人が居るんじゃない？」

悠里「そう……よね……」

凜音「悠里、ちよつとだけ良いかい？」

悠里「なあに？」

凜音は悠里に手招きし、悠里は凜音に近寄る

凜音「これは持って帰っても？」

そう言い指を指したのは洋酒入チヨコレートだった

悠里「洋酒入のチヨコレート？大丈夫だと思っただけだ」

ヒワインド「こちらヒワインド、カートを見つけた。これより米のあるコーナーに行く」

凜音「了解」

薫男 side

薫男「うーむ……」

薫男は悩んでいた。ココ最近ミンティアの数が少なくなっていたため、確保しようと考えていたのだが、

卓「まさか無いとは…」

薫男「まあ、消費期限切れでない食料だけでも持つていくか」

そして再び両チーム合流

薫男「ヒワインドチームが米30kgを3袋確保していたからな…」

凜音「とりあえず最初に一旦これを積んでこよう」

シヨツピングモール組 side

美紀「！圭、ジョン！」

圭「なになに!?!」

ジョン「どうした!?!」

美紀「あれ！」

美紀が窓の外を指す

ジョン「… あれは…」

圭「もしかして誰か来てるのかも！」

ジョン「あの車…もしかしたら、うちの部隊かもしれん…」

圭「本当に！」

美紀「つてことは…」

ジョン「そうと決まれば脱出だ、2人とも荷物纏めてくれ」

ジョンはそう指示を飛ばすと愛銃のM9 A1と何故自分自身持っているか分からない
かったが親友のSIG P226を持つ

ジョン「さて、アイツもやっぱり生きてんだろうな」そう呟いたジョンの表情には笑
みが零れた

第7話 みんなで

凜音「あー…重かった…ひっさしぶりに米30kg担いだ」

凜音は車に戻り、米を積み込んだ後、StreamのトランクからKrebs Tactical Rifle 03を取ってきた。

米を積み込むのには少々邪魔だったし、この銃には光学サイトを装備していて、遠距離を狙撃することも可能なのだ

ヒワインド「よしそれじゃあ、各自バックパックは背負ったね？服を調達だ！」

女性陣「おー！」

薫男「……なあ、凜音」

凜音「何？薫男」

薫男「めっちゃ服選び長くね？」

凜音「まだ30分しか選んでないけど？」

薫男「いや！明らかにあげえよ！」

卓「女子だったら、こんなもんさ」

薫男「まじかー…」

薫男は女性陣の服選びの長さにげんなりしているが案外他3人は平気そうだ。

それもその筈、もとより凜音はウインドウショッピングが趣味レベルで好きだったし、卓は昔彼女が居たこともあつて待つのに慣れている。ヒワインドは時間などあまり気にする人間ではないので、薫男だけが疲労していた

由紀「ねえねえゆつきー！」

薫男「んお？由紀か？どした？」

薫男が顔を上げると

由紀「じゃーん！」

胸元がセクシーに開いたドレスを着こなす由紀が居た。

薫男「うおっ!?（顔真っ赤）露出度高すぎだろ！」

由紀「えへへー／／でも、ゆつきー、喜んでくれるかなーって……」

薫男「まあ、なんだ……結構似合ってるぞ……でもあんまり俺以外の前でそういう格好はして欲しくないかな……」

薫男には薫男なりに由紀に対する思いは譲れないようだ

悠里「ど、どうかしら……？／／／」

凜音「悠里、ずっと一緒に居よう。」

悠里「んもう！／／／当たり前よ」

この2人は本当甘々である。ブラックコーヒーが欲しい所である
慈「ええつと… ヒワインド…くん…？／／」

しっかりとしたスーツのような格好

ヒワインド「d（、∇、*）」

胡桃「えーつと…どう…かな？」

卓「うん、いい感じだよ。」

胡桃「えへへ…／／／」

と言った感じで女性陣の服の調達が終わり、男性陣はとりあえず動きやすい服装と下
着を調達し、5階へと向かう途中

凜音「!!」

凜音はある事に気がつく。5階の映画館近くに葉莢が落ちていたのだ。

凜音「皆、もしかしたら銃を持った生存者がいるかも」

一同「!？」

凜音「この葉莢、俺たちの銃の物じゃない」

薫男「… 対人戦闘か… だが由紀たちは俺が守る」

卓「絶対に誰も欠けさせないよその為なら… 撃たせてもらう」

一方ジョン達

ジョン「さて、荷物整理はOK？」

圭「うん！」

美紀「うん、大丈夫」

ジョン「脱出だ！」

ジョンはそう言うと、近くにゾンビが居ないことを確認し、圭と美紀を連れ、部屋を出る

ジョン「ヤツらに囲まれそうだったらコイツを使う」

圭「えーっと、防犯ブザー？」

ジョン「こうするのさ」

そう言うと防犯ブザーを鳴らすと同時に自分たちの進行方向から遠い方へ投げる

ジョン「こうすれば、音に気を取られてヤツらに襲われない。」

美紀「へー… ジョンはそうやって戦ってたんだ…」

ジョン「ま、これだけじゃなく、ペンライトなんかも使ってたがな」

一方 学園生活部

凜音「…！防犯ブザーの音？やっぱり生存者が…」

薫男「一旦安全な所に身を隠すぞ」

一同「……」

一同「ω・()ジー」

ジョン「よし、圭、美紀、走るぞ！」

凜音「やっぱり生存者チームか！」

薫男「なあ、さっきの奴の声ジョンっぽくね？」

物資は確保し、生存者搜索はジョン達がいると分かれば後は車に戻るだけだ。

ヒワインド「みんな車に戻るよ！」

一同「了解！」

ヒワインド「やっぱり固まっているな……」

凜音「悠里、下に爆弾（ペンライト）ばら蒔いて」

悠里「分かったわ」

卓（なんでペンライトってわかったんだろ…）

凜音「よし、行けるぞ」

そして1階まで行き、3人に追いついた所で

凜音はジョンに声を掛ける

凜音「よお、ジョンハーレムか？」

ジョン「おうっ!?凜音!やっぱりお前か！」

圭「ジョン、その人が凜音さん？」

凜音「始めまして、掛名沢凜音です」

美紀「どうも、直樹美紀です（ぺこり）」

圭「祠堂圭です（ぺこり）」

薫男「とりあえず車まで行くぞ！」

そして無事、車の停めてある場所まで着いた一行

ジョン「ふむ、学校で暮らしてたのか…」

凜音「まあ、一時的にだがな、シャワーもあるぞ」

シャワーがあると言う単語に反応したのは美紀と圭だった

圭「ホントですか!?!」

悠里「ええ、電気が太陽光で生きてるから、電化製品も使えるのよ」

美紀「やった:~」

慈「それじゃあ、学校に帰りましょうか?」

一同「はい!」

こうして無事にジョン、圭、美紀を連れ、学校に戻った。

第8話 いぞん

圭「改めて自己紹介しますね、私は祠堂圭、巡ヶ丘学院高校2年です。」
美紀「同じく2年の直樹美紀です。よろしくお願いします」

ジョン「ジョン MAD パーカー、凜音達とは戦友だ」

凜音「これからよろしく」

薫男「よろし、後そうだ。ジョンに言いたい事あったんだが…」

ジョン「なんだ？」

薫男「帰wwwwwwれwwwwww」

ジョン「い つ も のwwwwww」

ヒワインド「よろしく」

由紀「よろしくー！みーくんとけーくんとうーん… ジョンくん！」

ジョン「なぜ俺だけ普通に名前…？」

卓「ドンマイ」

圭「えーつと皆さん男女同士ですけど、お付き合いと…」圭が最後まで言い切る前

に良く見ると

悠里 凜音にべったり

由紀 薫男の膝の上

慈 ヒワインドと手繋

胡桃 さり気なく卓に寄り添う

圭「あつ…(察し)」

ジョン「いいゾ、これ」

美紀「何なんだろうこの疎外感…」

美紀視点

ジョンと出会う前の美紀ならばきつとこの環境をそれぞれが依存していると言った所だが、ジョンと出会ってからはドクペに半依存気味になっていたので。この関係を共存だと言う事はできなかった。いやしたくなかった。きつとそう言ってしまったら自分で自分の首を締めるから

悠里「美紀さん、考え事？」

美紀「あ、悠里先輩。そうです、少し考え事を」

悠里「リーさんでいいわ、はいこれ」

そう言つて悠里先輩はドクペを差し出してきた

美紀「… ありがとうございます」

悠里「これ、嫌いだったかしら？ ジョンさんが美紀さんにはこれを飲ませておけば良
いって言っていたのだけれど」

美紀「あの人はなんて事を… まあ、これ好きなんですけど」

圭「みーき、なんか難しい顔してるけどなんかあったの？」

美紀「ううん、なんでもないよ。ちよつとぼーつとしてただけ。」

圭「ふーん、それでさ美紀この前私見ちゃったんだよねー」

美紀「何を？」

圭「薫男先輩が由紀先輩に壁ドンしてたのー！」

美紀「なんだ、そんなことかー…」

圭「あれ？ 反応薄くない？ ちよつと前の美紀だったら顔真つ赤にしたのに」

美紀「散々目の前でイチヤイチャされたら慣れるよ」

実を言うと美紀はかなりの頻度でそういう場面に遭遇する。この前なんかは図書室
に行つたら佐倉先生とヒワインド先輩がキスする直前の場面に出くわしたし、

音楽室の前を通りかかったら真つ赤な顔した薫男先輩と由紀先輩にすれ違つたし（恐
らくキスしてた）

散々な目に逢つて慣れたのだ

慣れって恐ろしいと思う

そのうち悠里先輩と凜音先輩は私の目の前で【自主規制】をおっ始めるんじゃないか
と思ってきた（白目）

美紀「色々あつたんだよ、色々…」（白目）

圭「なんか美紀疲れてない？大丈夫？」

美紀「大丈夫だよ、問題ない。」

ジョン「どうした？後輩組浮かない顔して」

圭「あ、ジョンだー♪」

美紀「ああ、ジョンか、とりあえずドクペかミンティア持つてない？」

ジョン「なんか… やさぐれてませんか？美紀さんや…？まあ、いいや、ほれ」ミン
ティア差し出し

美紀「ありがとう」

ミンティアを噛み砕く

圭「… 美紀って噛む派だっけ？」

ジョン「いや、ペロペロ派」

圭「つてことは相当来てるねー… ジョン、よろしくー」

ジョン「…マジかー…」

美紀ミンティア噛み噛み

ジョン「美紀、こつち向きな」

ジョンはそう言うと口にドクペを含み

美紀「んうっ!…♡」

美紀に口移しする

ジョン「落ち着いたか？」

美紀「…ひゃい…♡」

圭（うわー… 美紀マジイキしかけてるじゃん… うらやま… 後でやつてもらお）

後日

ジョン「〜♪」

圭「ジョン、こつち見て♡」

ジョン「圭か、何かし〜むぐう…」

圭「んっ…♡（やつば…ミンティア口移しするの気持ちよすぎ…癖になりそ…）」

圭「んう…♡ぷはあ!…♡美味しかった?♡」

ジョン「あ、味なんて分かるか!／／」

美紀「やっぱりジョンに依存してるんだなー私達…ちよつと方向性は違うけど…」

第9話 きずあと

凜音「……………」

凜音はココ最近、学園生活部の部室の窓から外を眺めてぼーっとすることがあった。

薫男「凜音、どうした」

凜音「なあ薫男、俺らつてき、誰かを救えたのかな？」

薫男「急にどうした？凜音」

凜音「……………俺はき、がつこうぐらしの世界を知ってて、この状況になつてる。俺はさ、あの子たちが普通に高校生として、遊んで恋して、泣いて笑って、そんな学園生活を送って欲しかったんだ。」

凜音「でも実際はどうだ？俺達が力を持っていても、結局騒動が起き、彼女達は学校

に閉じ込められて、今まで一緒に勉強して来た友人だつて大勢死んで、俺は一体彼女達の何を救えた？俺はどうしたらいいんだ？」

薫男「…… 凜音、そいつは違うな、俺達は力を与えられたが何も神じゃ無い。ただの人間だ、それに俺達がいなければ、もっと多くの奴が死んでたんじゃ無いのか？」

凜音「……」

薫男「それにな、過去は変えられねえんだ。時間と命は決して止まることは無い、変化とは生命の法則である。そして過去や現在しか見つめていない者は確実に未来を見過ごすこととなる」

凜音「…… ジョンFケネディ大統領の名言か」

ヒワインド「そうだな…薫男の言う通りだ。俺達がいなきや、めぐねえも圭も死んでたんだ。全く救えなかった訳じゃない。確かに先輩は残念だったが、どうしようもな

かったじゃないか……」

凜音「ああ…… そうだった、俺達は生き残れなかった人の分まで生きるんだ……」

凜音（だから、多少誰かに依存するのは良いのかもしれない）

一方学園生活部チーム

悠里「凜音…… 最近なんだか元気無いみたいなんだけど……」

慈「え……？ 凜音さんが？」

由紀「そうだよね、なんか最近りーくん空返事だもん」

胡桃「確かに最近凜音元気無いよな。」

悠里「それになんとか一人で居る時に泣いてたような気がしたの……」

慈「え？」

由紀「え？」

悠里「えつと？2人ともどうしたの……？」

由紀「今すぐりーくんの所に行って慰めてあげてりーさん！」

慈「そうね！今すぐ慰めに行つてあげて！そしてちゃんと着けるのよ！」

悠里「え？え？」

圭（…… 今度ジョンの事を逆レしてみよっかな）

ジョン（うっ…… 今なんか寒気が……）

美紀（ああ…… ジョンとのキス良かった…… もし激しくつて言つたらもつとす

ごいことしてくれたり：：／／／キヤー／／／

そして悠里視点

悠里（うわゝ… 由紀ちゃん… 薫男さんとそういうことしようと思ってたのかしら？正直びっくりだわ… 由紀ちゃんの事だから赤ちゃんはコウノトリさんが運んで来るんだよ！とか言うと思ってたんだけどなあ…）

悠里「うっ…：： 実際に凜音とそういうことしようと思うと心臓が…：」

悠里（それにめぐねえが悠里さんならきつと上手に出来るわって言ってコレを渡してきたんだけど、ね、もうね子作りしてるのかしら…：：？）

凜音「悠里？どうしたの？こんな時間に？」

悠里「ちよつとお話しない？凜音」

第10話 ぶらっくおぶす

生物兵器はその性質上意図しない形質が発現することもあり、初期の封じ込めに失敗した場合所謂パンデミック状態に陥った場合は人間の主としての保存を最優先に考えること、あなたへの双肩には数百万の命がかかっている。寛容と労りの精神は今や美德ではない

最初に声をあげたのは胡桃だった

胡桃「ちよつと待て！コレなんだよ!?!何なんだよ!?!」

美紀「生物……兵器……？」

悠里「そんな………？」

凜音「……クソが」

薫男「生物兵器禁止条約もあつたもんっじゃねえな……」

慈「なんで？どうして？私が最初にコレをしつかり確認しておけば……こんなことは……これは大人の……私の責任だ……」

ヒワインド「めぐねえ落ち着いて！めぐねえがコレを知ってたとしてパンデミック状態が起こるのを止められたのかい？」

慈「っ……!!？」

由紀「そうだよ！めぐねえのせいじゃないよ！」

圭「でも！コレを作った人はこうなる事を考えてたの？」

ジョン「あくまでも最悪の場合だろうな……」

卓「……信じられない……」

薫男「だが、これでこの状況を創り出しやがったクソツタレに目星がついた訳だ。」

凜音「……ランダルコーポレーション奴らに死を……！」

ジョン「1歩目は？」

ヒワインド「鍵を手に入れろ！」

凜音「2歩目は？」

卓「学校からの脱出！」

薫男「3歩目！」

凜音「烈火の攻撃を！」

凜音「という訳で、作戦を考えましょう。」

薫男「うーむ… M9バズーカあれば良かったのに…。」

ジョン「やめろ」

卓「でもあつた方が良かったなー」

凜音「全くだ」

ジョン「……あれ？」

ヒワインド「めぐねえ、テルミット反応の実験出来るもの化学室とかに無い？」

慈「えーつと… 多分あるわ」

凜音「じゃあそれを大型にして……」

薫男「空き瓶にアルコールを染み込ませた布を入れーの」

卓「片栗粉を宙に舞わせて……」

「ジョン「そこに投げ入れる！」

由紀「そうするとどうなるのー？」

薫男「大☆爆☆発☆」

胡桃「コイツらヤベー…」

かくして、対ランドルコーポレーション決戦の作戦はまとまった。

テルミット反応を応用した擬似ヒートチャージを作り、壁に大穴を開け、それと共に片栗粉を仕込んでおき、上手く行けばここでさらに大爆発、もし爆破しなかった場合はそこに火炎瓶を投げ入れる。

名付けて作戦名「絶対ランドルコーポレーション爆破する作戦」である

悠里「頭痛いわ…」

圭「もうめちやくちやだよ」

美紀「ああ〜ランダルがボンボンするんじやあ〜」

由紀「なんか分かんないけど。やつちやえ、バーサーカー！」

慈「ランダルコーポレーション！貴様等は震えながらではなく藁のように死ぬのだ
！」

胡桃「もうやだ。この部活…」

薫男「行くぞ！俺達の戦いはこれからだ！」

ジョン「それ打ち切りエンド凜音「キング・クリムゾン！」

今回はここまで！

第11話 えくすたーみねーたーず

巡ヶ丘市にある製薬会社（ランダルコーポレーション）

研究者A 「H H A H H A H H A H H A！このウイルスさえあれば世界征服だって出来るZ
E ☆」

研究者B 「へっへっへっへ…こいつがあれば思いのままだ…」

チーム学園生活部

凜音 「おし、殺るか」

「壁」 ヒートチャージ（片栗粉入）

薫男「おっし、ヤルゾー」

「壁」粉々だぜ！

ヒワインド「汚物は消毒だー（火炎瓶ほいほい）」

研究者A「アツウウウウイ！（丸焼け）」

研究者B「イワアアアアアアク！（まる焦げ）」

凜音「クリア！」

ジョン「俺達が悪役のようだ…。」

薫男「次よー！」 擬似ヒートチャーჯセット

「壁」派手に吹き飛んだぜ！

研究者C「なんだ!？」

凜音「ごきげんよう、そしておやすみなさいだ」

凜音はKTR03で動揺する研究者を速攻で射殺する

ジョン「……………酷えや……………」

ヒワインド「俺をお探し?」

研究者（以下略

ヒワインド「とりあえず死ぬがよい」

M60で研究者達を瞬く間に肉片に変えていく。

卓「痺れるねえー」

薫男「いいセンスだ。」

ジョン「俺がいる意味ねー」

因みに彼らは学園生活部を連れてきていない。何故なら生身の生きている人間を殺す様などを見せるべきではないからだ

研究（以下略

ヤメロー！シニタクナイ！

薫男「だが断る。この白水薫男様が一番嫌いなのは自分さえ助かればいいと思ってるクズみたいな人間なんだよ！」

薫男に慈悲などない、有るのは死という救済のみだ

AA12を両手に持ち、その怒りのたけをぶつける。AA12 2丁の銃弾を避けるなどかの有名なウエスカーでも不可能だ

そして、もう何百人という数の研究者達を虐殺し、ようやく施設の中核に辿り着く。

一同「ここがああの子のハウスねっ！」

責任者「クソツタレ！何なんだよ！たった5人のガキどもに…!?」

凜音「言いたい事は山ほどあるがまあ、その前に」

凜音は笑顔でKTRO3で足を撃ち抜く

凜音「これは俺の分、ちよつと我慢できなかつた☆」

責任者「ぐあああああああああ!?!」

薫男「てめえには、生きててもらわねえといけないから俺達とこい。てめえには拒否権も無えし、人権も無えぞ、それだけの責任がてめえにはある」

卓「お前らは殺したんだ…何十万人という罪のない人々を」

ジョン「死など生温い、俺達の大切な人を悲しませたんだ……」

ヒワインド「少しは狩られるものの気持ち解ったか？」

凜音「…………… いずれ分かるはずだ。貴様にも、自分の罪の重さが」

こうして無事にさばげーがえりの5人は学園生活部の待つ部室に帰還する。

それぞれの思いを胸に抱いて

第12話 かわらないばしよ

凜音「ふう… 疲れた」

薫男「俺ももう無理ー」

彼らさばげー生活部（ゴミクス分隊）は私立巡ヶ丘学院高校に帰投していた。

ジョン「そう言えば、あのクスはどうした？」

卓「ん？後ろに引きずってるよ」

ヒワインド「当然の報いだね。」

ジョン「やることが派手だねえ」

凜音「もちろんです。(拷問の)プロですから」

薫男「取り敢えず、電波の復旧の見込みがこれじゃあな…。」

ヒワインド「最悪、情報の証言を録画してメモリーとして取っておけば、殺しても構わない。むしろ、法律なんて機能してない、そうなれば、殺すのが1番だ」

凜音「それか、両手両足を縛った状態で、奴らの仲間入りをさせてやるのはどうだろう?」

薫男「苦しみを味わってから殺そうってのか、良いセンスじゃないか」

ジョン「それいいな、そうしようか!」

そして5人は車を止め、気絶している責任者を叩き起す

凜音「目覚めの気分はどうだ？このクズ野郎……」

責任者「……うっ……」

薫男「取り敢えず、こんな事が起こった原因を嘘偽りなく吐け、嘘をつく度にお前の指を吹き飛ばしていく」

責任者「わ、分かった……全て話す」

ジョン「なんだ、素直だな」

そして責任者は全てを吐いた、パンデミックの起こった原因、そしてワクチンについて

責任者「これで知ってる事は全部だ……」

凜音「しっかり録画してメモリーに残したからな」

薫男「お前にもう用はない」

薫男はそう言うと、責任者の両手両足を縛った状態で奴らの前に放り出す

責任者「嫌だ！助けてくれー！頼む！うわあああああ！」

凜音「今、助けてやるよ」

凜音はそう言うとKTR03のトリガーを迷わず引いた

5人「やっと、帰ってきたな…」

5人「ただいま」

学園生活部「おかえり！」

凜音「まあ、何となく検討がつかだらうけど、ぶっ潰して来たよ」

悠里「良かった…無事でいてくれて…」

由紀「もう！ゆつきーは無茶すぎだよ！」

薫男「わりい、わりい」

ヒワインド「今戻ったよ、慈」

慈「ヒワインド…」

ジョン「あー…その…なんででしょうか…？」

圭「じとー…」

美紀「じとー…」

2人「心配したんだから！バカジョン！」

ジョン「ええー… 理不尽…」

凜音「さて、再会を祝いたい所だが、まだ解決した訳じゃない。まだ学校の地下を探索してないでしょ？」

慈「ええ、まだ地下には行っていないわ」

ヒワインド「じゃあ、地下には俺と薫男の2人で…」

胡桃「ちよつと待ったあ！校舎内の奴らはほとんど居ないんだし、全員で搜索した方が良くないか？」

卓「・・・胡桃ちゃん」

胡桃「それに、最近シャベル振る訓練しかしてなくて実績が最近減っててなあ・・・」

由紀「胡桃ちゃんってば本当にシャベル好きだねー、シャベル君と結婚するの？」

胡桃「アホか！お前は！」

由紀「うっ・・・ごみい・・・」

薫男「どうしたもんか・・・」

凜音「今のゴミクズ分隊の隊長は薫男だぞ」

薫男「よし分かった。全員で地下の物資を確保しに行くぞ」

全員「了解！」

胡桃「……一体みたいだな、あたしが殺る」

胡桃はそう言うのと飛び出し、奴が気づく瞬間には奴の足をシャベルで『切断』し、身体を捻る遠心力を利用してそのまま首を撥ね飛ばす

薫男「流石シャベルのプロだ」

ジョン「なんかシャベルで銃弾弾けそう」

凜音「後で教えておこうか」

ジョン「やっぱりあの戦い方教えたの凜音かよ！」

由紀「めぐねえもシャベル持ったら？そしたらシャベル先生だよ！超強そう！」
めぐねえ「先生重いものはちよつと…」

ヒワインド「でもロツカー使って奴ら叩き潰してたような…」

由紀「」

悠里「」

美紀「佐倉先生凄いですね（白目）」

圭「もうツツコミが追いつかない…」

凜音「そろそろ地下区画だぞ、気を引き締めろ」

薫男「由紀、俺の傍にいろ」

ヒワインド「めぐねえこつちに」

ジョン「みけコンビ、こつちだ」

美紀&圭「誰がみけですか！」

凜音「悠里」

悠里「ん」

凜音「行くぞ」

薫男「あまり奴ら居ないな…」

ヒワインド「多分この地下区画の存在を知ってたのはマニュアルを読んだ教員位だろう」

胡桃「…」

卓「……………吐き気がするね」

胡桃「進もう…」

凜音「ここからは少し別行動にしよう。食料品を確保する班と薬品類を確保する班だ」

ヒワインド「Ok、じゃあ、俺はジョンと卓と組む」

薫男「久しぶりに凜音とか、モールの作戦以来だな。」

凜音「こつちで食料品を確保するから、そつちは薬品類を頼む。」

ジョン「でもよ、凜音って多少なりとも薬の知識あるだろ？ だったら凜音達がこつちの方が良くねえか？」

薫男「あー… そういやこいつ医学系だったな…」

凜音「じゃあジョンと交換で」

ジョン「まあ、だよな」

薫男「よし、じゃあ行こうかね」

side 凜音

凜音「もしかしたらこれは夢じゃないかと思う時がある、だが夢であって欲しくないとも思う」

卓「……………」

ヒワインド「…………… そうだな、夢であつては欲しくない」

慈「でも、あなた達には家族や友人が……………」

ヒワインド「俺たちが居ないことで慈が死ぬのは嫌だ…………… それに圭もだ……………」

凜音「俺たちは、救えた人も居たんだ…………… それを夢にはしたくない」

胡桃「…………… そうか…………… そうだな！」

悠里「凜音……………」

さて、もう少しで保管場所だ、ワクチンはこの試験薬しか無いとあのクズは言ってい

た。恐らくそれは事実だろう、現に爆破した施設からはワクチンはこれと同じものしか無かった

side out

side 薫男

薫男 「……なんでジョンと一緒に……」

由紀 「まあまあ、ゆつきー、ジョン君が来てるって事はみーくんとけーくんも居るんだよ、ゆつきー最年長さんだね！」

薫男 「それは凜音とりーさんでも同じだろ！」

由紀 「あつ、そうだったよー、ごみい……」

ジョン「……なんか俺嫌われてるのか？」

圭「多分違うと思うけど……」

美紀「そもそも嫌われてるのなら薫男先輩の性格的にジョンは今頃粗挽き肉団子どころか粉微塵になってましたよ」

ジョン「……それもそうだな」

薫男「まあ、ジョンだからな」

そして暫く進んだ時である、大きな冷蔵庫が見える

由紀「どどどどどうしよう!？」

薫男「おおおおおおお落ち着いてれれれれ連絡ダダダ!!」

ジョン「お前から落ち着け」

side out

薫男『こちらブレイザー1 巨大な冷蔵庫を発見した、至急戻ってきてくれ』

凜音「・・・こちらブレイザー4 了解」

凜音「聞こえたな。薫男が巨大な冷蔵庫を発見したらしい。急ぐぞ」

ジョン「コイツはすげえな」

美紀「中身があるとは限りませんよ・・・」

圭「もう、美紀は夢がないなあ、もうちょっと期待してもいいと思うよ？」

美紀「そうかなー？」

圭「あ、凜音先輩遅刻ですよ。」

凜音「道が混んでた（大嘘）」

悠里「すごいわね・・・」

胡桃「・・・でも中身が生きてるか・・・」

恐る恐る冷蔵庫を開ける一行そして・・・！

一同「いったただきまーす！」

凜音「幸せだ…… 一体何ヶ月ぶりにお肉を食べただろう……」

薫男「あー……… 揚げえなこりゃ」

ジョン「俺、こんない肉初めて食った」

卓「……… 美味しすぎ」

ヒワインド「これ、おいっしいー！」

悠里「御飯はたくさん炊いたわよ」

凜音「おかわりする人挙手！」

全員「はい！」

そうやって手を挙げたみんなは眩しい笑顔だった。

閑話集

第13話 むこうがわ

美紀「あつ、図書館に新刊だ、借りて行こう」

美紀「由紀先輩も薫男先輩ももと本を読めばいいのに……そうすれば由紀先輩は相応の言葉遣いに……薫男先輩は相応の知識が……」

美紀イメージ

薫男「美紀、今日の気温は16℃、湿度は30%、天気は晴、不快指数は……」

美紀イメージ終了

美紀「……ありえないか」

ふと、窓の外を見ると、トラックを走る生徒が見える

美紀「陸上部かな？胡桃先輩どこだろう？」

美紀「ふう、今日も平和だ」

最近、学校が楽しい。まあ前がつまらなかつたという訳では無いけど
素敵な先輩に、憧れの先輩、ちよつと頭のネジが足りないかなって思う先輩もいるけ
ど

ジョン「ちよ！」

すごく楽しい。私は学校が好きだ。

美紀「さてと、帰ろう」

美紀「あれ…？」

なんだろう… この違和感は…：… 何か、大切な何かを忘れているような…
はっ！

凜音「美紀さん、放課後にサバゲ部の弾速チエックと、ジュールチエックお願い」

忘れてたー！

先生「こら、廊下を走ったらいけませんよ！」

美紀「す、すみません！」

急いで走っていたので、廊下の曲がり角から出てきた生徒とぶつかって転ばせてしまった

美紀「す、すみません急いで、怪我とかありませんか？」

生徒「：： ちょっと足首捻っただけ」

美紀「本当にすみません保健室に：：」

生徒「大丈夫」

美紀「えっ：：」

生徒? 「だあ：： いじよ：：：： うぶ」

美紀「ひっ：：：： あっ：： あ：： あ：：」

先生? 「だから、廊下を走ったらだめって言ったでしょ?」

美紀「：：：：： つ!」

私は大切な事を忘れてる

胡桃「下校の時間だな」

ジョン「ああなつても、律儀に生活してんのな」

美紀「生きてはいないですけどね。時々思います、彼らの中では前と変わらない日々が続いていてここは未だに平和な世界であり続けているんじゃないかって」

美紀「先輩！」

美紀「良かった……みんな無事だったんですね」

ジョン「……下がってろ」

美紀「ジョン……？」

だからふと思ってしまうことがある。

『むこうがわ』の方が

幸せなのではないのだろうかと……

美紀「……………」

美紀「寝てた……………」

ジョン「うなされてたな、大丈夫か？」

圭「最初は良かったんだけど、途中からすごい辛そうだったよ？」

美紀「大丈夫。」

きつと、「生きていることって素晴らしい」と思えるうちは『むこうがわ』に行くのは早いのだろう．．

第14話 くるみ替え人形

胡桃 「どこだ… 無い…」

胡桃 「ないない！」

胡桃 「なああああいつ！」

卓 「どうしたの？」

胡桃 「あたしのシャベルがなーーーーーいっ！」

凜音 「…… 中々見つからないな……」

美紀「校内を探してみますか？」

ジョン「それで良いような気もするが…。」

由紀「シャベルが見つかるまで、何かで代用できないかな？」

全員「それだっ！」

みーくん作

クツキングガール

美紀「包丁は少々リーチが短いですが、そこはフライパンを盾がわりにする事でカバーして返り血対策のエプロン装備です！」

凜音「やっぱリーチがな…。」

ジョン「ナイフ戦闘なら俺が教えよう」

由紀「くるみちゃんかわいい！」

凜音「じゃあ、俺と薫男の案」

胡桃M870MCSソウドオフ+AA12装備

凜音「奴らを殲滅する鉄の意志と鋼の強さを重点におきます」

悠里「オーバーキル…」

圭「どつちもショットガンかあ…」

胡桃「重たすぎだろ！」

薫男「戦力が2倍にできると思ったんだがな…」

卓「そんな理由か：」

由紀「次はわたしだ！」

胡桃「不安しかねえ：」

由紀「胡桃ちゃんは卓くんとセットだからね！胡桃は卓くんに守ってもらいます！」

悠里「1番までもね」

美紀「までもです」

胡桃「えー：あたしに武器が無い！」

卓「じゃあ、はいこれ」

胡桃「……なにこれ」

卓「GLOCK17」

胡桃「結局銃かよ！」

圭「やっぱり胡桃先輩はシャベルしか愛せないんですか？」

胡桃「お前……からかってるのか？」

圭「いえ、そういう訳ではなく銃は遠距離から一方的に奴らを仕留められるのに何故胡桃先輩はシャベルに拘るのか知りたくて」

胡桃「うーん……あいつらは身体能力も高くて最悪、銃が無くては奴らを仕留められるんだ。」

胡桃「でも、あたしは武器が無いと仕留められない。奴らを殺すのは武器じゃなくて、あたしの力なんだって忘れないためにシャベルを使うんだ」

卓「それと、強力な武器を持つのなら、それと同じ位の強力な力をつけたい。と」

圭「…」

ジョン「そのうち分かるさ」

圭「そうなの？」

薫男「おーい、行くぞ」

ジョン「了解」

胡桃「うーん…」

卓「どうしたの？」

胡桃「やっぱり何か握ってないと落ち着かない…」

卓「手、繋ごうか」

胡桃「…っ！／＼／」

悠里「校内はほとんど制圧してあるけど、油断しないでねー」

一同「はい」

慈「あら？恵飛須沢さん……」

胡桃「め、めぐねえ！／＼／＼」

慈「頑張つてね」

胡桃「うう……／＼／＼」

由紀「……添い寝？」

由紀が胡桃の布団をめくると、そこからシャベルが見つかったのは搜索開始10分後のことである

第15話 からおけ

凜音「カラオケに行きたい（唐突）」

悠里「本当に唐突ね…」

薫男「だが、カラオケ良いなー」

卓「よし、カラオケ屋をちよつと制圧してこよう」

胡桃「卓がすごいやる気まんまんなんだ!？」

ジヨン「あー…卓君はカラオケ好きだからねー」

ヒワインド「カラオケかあ…」

慈「カラオケね…はは…」

由紀「カラオケ!?行ってみたい!」

美紀「由紀先輩、行ったことないんですか!?!」

由紀「うーん…無いかなあ」

圭「楽しいですよ!」

薫男「よし、全力でカラオケを制圧するぞ」

凜音「由紀が絡むと薫男が本気になるからなあ…ま、俺も悠里の歌聞きたいし（ボソツ）」

一同移動中

薫男「凜音、ドアブリーチ！」

凜音「OK！」

凜音がM870で店のドアをこじあける

胡桃「あんた達、誰かに野蛮だつて言われたことないか…？」

凜音&薫男「いつも平気でやってることだろうが！今更御託を並べるな！」

ジョン「酷えや…」

圭「美紀！」

美紀「わかってる！」

そう言い、圭が鉄パイプでヤツらの脚を払い、転ばせたところに美紀が留めを刺す華麗な連携である

ジョン「立派な戦闘員に育ってくれて俺は嬉しいよ（涙目）」

胡桃「オラア！」

胡桃はそう掛け声を上げながらシヤベルでヤツらを真つ二つに斬り裂く

悠里「まって、胡桃。いろいろおかしい。なんで刃物で斬ったみたいになるの!？」

凜音「俺が教えた」

悠里「りおおおおおん!？」

慈「流石ね（白目）」

そういうながら慈はそこにあつた掃除用具入れでヤツらを叩き潰す

ヒワインド（よつほど慈も凄いことしてやるよ…）

結局10分掛からずにカラオケの中と周辺のヤツらを殲滅した一同は大部屋に陣取った

由紀「おお！すごい！広いよ！みーくん！」

美紀「はいはい、わかりましたから歌いましょう」

凜音「誰から歌う？」

薫男「…卓君だな」

卓 「俺か…じゃあ…欠落オートメーションで」

胡桃 「卓ワンオクか…そういうや車で流してたな…」

卓 「いつどんな時どんなタイミングで、僕はそれを失ってしまったんでしょう？」

由紀 「上手い…」

胡桃 「すげえ…」

美紀 「流石ですね…」

卓 「あ…久しぶりで緊張したー」

胡桃 「めっちゃ上手かったな！」

由紀「うん！さすがすぐにやん！」

薫男「さしずめすごすぎるってか」

一同「…」

薫男「…次凜音よろしく」

凜音「俺かー…何歌おうかな…」

凜音「んじゃ、最初だし、儂くも永久のカナシで」

由紀「確かガンダムの主題歌だよね！」

胡桃「知っているのか!?!由紀」

悠里「歌い出すわよ」

凜音「愛が愛を、重すぎるって理解を拒み…憎しみに変わってく前に…」

薫男「あ、音量注意」

凜音「何もかもそうだろ！バツの悪い事情にはいつも蓋して！食わせ物のリアル！」

圭「すっごい音量…」

慈「でも普通にうまいわ…」

凜音「あー…音程外したな…」

一同「あれで!？」

由紀「次私歌うー!」

薫男「おっ!由紀の歌かー(きつとかわいい歌なんだろうな)」

由紀「じゃあ行くよ!えーつと…漢字わかんないけど、ダウルダヴラ」

凜音「!？」

由紀「すうー…嗚呼終焉への追走曲が薫る…殺戮の福音に血反吐と散れ!微分子レベルまで解剖して…反逆を永劫に断つ…」

一同「…(。D。)」

由紀「奇跡など殺すと誓ったのだ！思い出など微塵も焼き消して！」

胡桃「マイク持つと性格変わるタイプって居るけどさ…」

圭「由紀先輩の普段からは想像出来ない凄い声…」

由紀「えへへ…どうだったかなあ？」

凜音（上手いどころか中の人同じだから！）

美紀「…先輩あんまりその歌歌わない方が良いかと…なんというか…ギャップがすぎすぎで…」

慈 「えーつと次は…私!？」

ヒワインド 「そうだね」

慈 「えつと…これで…」

凜音 「ええ… (困惑)」

慈 「ピーカンの空見上げ解ったのデスよ」

ジョン 「マジかよ…」

胡桃 「まさかの選曲…!」

悠里「由紀ちゃんと同じアニメのキャラクターの歌ね」

慈「拝啓、かみがみのみなサマなんとか おねがいデス時を戻してほしい…の起き毛紙デス(T T T)」

圭「…佐倉先生の意外な一面がここに…」

悠里「(。D) (あまりの驚きで声が出ない)」

慈「うう…まさか丈槍さんのアニメと被るなんて…」

由紀? 「俺の歌はただの一人で70億の絶唱を凌駕するフォニックゲインだ!!」

薫男「!? (。D)」

美紀「…もう…わけがわかりません…」

慈? 「デース!」

悠里 「次は胡桃よ」

卓 「!!」

胡桃 「えーつと…ウラオモテフォーチュンで…」

胡桃 「反対の、反対の、反対の、反対の、反対の、*fortune*」

由紀 「胡桃ちゃん可愛い!」

胡桃 「キミの本当の、本当の、本当の、本当の、本当の包み隠さない本音を聞きたいだけなのに今日も また揺らいでる…」

胡桃 「うう…結構恥ずかしいな」

圭「でも上手でしたよ、胡桃先輩！」

卓「うん、上手かったよ」

胡桃「あつ…ありがとう…／＼／＼」

由紀「次はみーくんだね！」

美紀「じゃあ…これで…」

美紀「未来は唯一つじゃないから、突き動かすのは高鳴るパルスだ
I c h a n g e t h e w o r l d I c h a n g e t h e w o r l d
一人きりじゃないから、迷わないでさあ、立ち上がれ！」

ジョン「なんというか…」

凜音「すごい…」

慈「美紀さんらしい…」

圭「美紀はいつつもこんなだから（諦め）」

凜音「あれ？次って悠里？」

悠里「ええ、そうよだけど胡桃と一緒に歌うわ」

胡桃「ああ、りーさんと一緒によく歌ってた歌なんだ」

凜音「へえー…」

悠里&胡桃「世界一No. 1のHERO太陽のようにキ・ラ・キ・ラ闇を街をパツと照らしていくよ」

卓&凜音「やったぜ。」

由紀「よーし！次は私とみーくんだ！」

美紀「え、ええ!？」

由紀&美紀「あのね あのね聞いてほしいあなたにすごいことあつたよ えーつと…
なんだっけ？ だから だから聞いてほしいあなたに胸の奥から こみあげる 言葉
投げてピンクのハートボール」

薫男&ジョン「やったあああああああああああ！(某ノツブ風)」

美紀「先輩、最低です。(笑)」

圭「私はどうしよっかな…セツナトリップにしよ！」

圭「探しに行くんだ セツナトリップ

飛べない わけない まだ内緒のハートに Dive!

脇目も振らず 出たところ勝負!

手痛い 停滞 撤退はしない」

ジョン「いや、上手いんですけど」

慈「若い子って凄いわ…」

卓「ゴフツ…(26歳)」

凜音「卓君に50のダメージ！」

ジョン「あらー…」

慈「はっ！卓さん年上だった！」

凜音「よし！最後にみんなでふれんどしたいでめるか！」

一同「おー！」

全員「わたしたちはここに居ます！ここには夢がちやんとある！ふれんどならともだちでしょ？好きって言って見た！」

全員「だいすき！」

第16話 くりすます

由紀「ジングルベル♪ジングルベル♪」

ジョン「銃^{すず}声が鳴る〜♪」

薫男「んな鈴あるか！」

薫男はジョンをAA12のストックで殴りつける

ジョン「い」だっ!？」

薫男「俺の由紀の歌を邪魔するなら貴様は敵だ」

ジョン「申し訳ございませんでしたあ！」

そう、崩壊した世界でも楽しみがあった。

凜音「今日はクリスマスだね、悠里」

悠里「そうね、こんな崩壊した世界だけど…貴方達が居るから。わたしたちは怖くないわ…」

凜音「そんなに褒めても、クリスマスプレゼントしか出ないよ？」

悠里「え…プレゼント用意してくれたの…／／」

凜音「うん、サイズあつてるといいんだけど…これ…」

凜音はマフラーを渡す

悠里「凜音…大好き…」

凜音「て、照れるって…」

胡桃「なんだろう…ブラックコーヒーの筈なのにマックスコーヒーの如く甘い…」

卓「おかしいなあ…練乳を飲んでる感覚になるよ」

そう、学園サバゲー部（由紀ちゃん命名）は部室でクリスマスパーティーをしていた。何？奴らが集まってくるんじゃないかって？何をおっしゃるうさぎさん、校舎内は殲滅済みに決まってるじゃないですかヤダー

慈「…シユワ来ませり」

ヒワインド「…シユワ来ませり…」

圭「なんだか筋肉モリモリモリマッチョマンが来そうだね…」

美紀「確かに…」

流石に料理は七面鳥なんかは手に入らないので、調達していたものだが、一応唐揚げなんかを作っていた。

そして料理なんかも整い、部員全員が集まり…

一同「メリークリスマス！」

パーティーが始まった。

ヒワインド「めぐねえ、今日は飲んでいいよ」

慈「えっ…でも……」

薫男「大丈夫ですよ、クリスマスなんですから。こんな時じゃないとアルコール摂取
できませんし」

慈「そ、そうね…じゃあ頂くわね…」

由紀「ゆっきー私はー？」

薫男「お酒は20歳になつてからなー、代わりにほらコーラだ、ZEROでいいか？」

由紀「ゆっきーが飲ませてくれるなら良いよ！」

薫男「しゃあないな、由紀こっち見」

由紀「わーい♡」

ズキユウウウウウウウウウウウ！

ジョン「わーお…」

美紀（鼻血ダラー）

圭「だ、大胆…」

ヒワインド（ニコニコ）

卓「すげえよゆきは…」

胡桃「な、ななななな！／＼／＼」

悠里「あーあ…」

凜音「おー…」

由紀「えへへー…♡」

薫男「結構恥ずかしいんだぞ、これ」
「そう言いながらも堂々としている薫男」

ジョン「漢だ…」

凜音「流石薫男だ、そこに痺れる憧れるう！」

そんなことがありながらもパーティーは進んでいく

慈「ヒワインド君！私プレゼント欲しいわ！」

ヒワインド「ははは…えーっと…酔ってる？ 慈、因みに何が欲しいの…？」

慈「当然貴方の赤ちゃん」ヒワインド「あー…酔ってるみたいだから今日はもう寝ようねー」

胡桃「ヒワインド大変だな…」

薫男「どこが？ あれならまだいい方だろ？ な、凜音」

凜音「…：…そうだね（白目）」

美紀「…お酒に酔うとあんなふうになるんですね…なんと言うか色っぽかったです」

圭「酔っ払いはあんまり真面目に相手しちゃダメだよ、美紀」

ジョン「ああ…酔っ払いの相手は大変だからな…（死んだ魚の目）」

凜音「ハハツ…」

きつとヒワインドは今夜は寝れないだろうなと思いつつながら凜音はグラスのお茶を飲んでいると…

悠里「ねえ…凜音…♡しましろう…?♡」

悠里が上着をはだけさせて、上気した瞳で凜音を見つめる

凜音「悠里、落ち着いて、まだパーティーの途ty」

悠里「うふふ♡良いじゃない…♡バレたら…見せつけてあげましょう?♡」

凜音「あ、ちよつと、待っ…アツ—！」

はつゆめ

気がつくと、事件の起きる前の世界に居た

女子生徒「あ、おはよう由紀」

由紀「おはよう！」

女子生徒「今日も学園生活部の部室から？」

薫男「ああ、そうだけ。だから由紀のやつぎりぎりまで寝てるんだぜ？」

女子生徒「あはは、由紀らしいね」

女子生徒「それにしてもいいなー、彼氏と一緒にずっとべったりなんて妬けちゃうわー」

薫男「ふっ（ドヤア）」

由紀「えへへー…」

甘々である

胡桃「うーっす」

卓「おはよう、今日も朝から見せつけるねー」

薫男「それはあつちに言ってくれ」

教室の全員が一斉にドアを見る

が、直視出来ずにほとんどの生徒が顔を真つ赤にして下を向く

その原因は当然

凜音「おはよう、みんな」(りーさんをお姫様抱っこ)

悠里(顔真つ赤)「お、おはよう…」

男子生徒「すげえ…」

女子生徒「あんた彼氏持ちでしょ？今度やつてもらいなさい」

女子生徒B「無理無理、絶対恥ずかしくてできないし、あんなに絵にならないよ！」

男子生徒「流石です。凜音様、悠里様」

凜音「様付けはダメだと何回言えばいいんだらうね？」

悠里「ええ、そうね…ところで凜音そろそろ…席だから」

凜音「はい。どうぞ」

いつの間にかお姫様抱っこのまま椅子を引いていた凧音は悠里を席に座らせる

女子生徒A「今のおかしいでしょ!？」

ジョン「うーっす。つと、まーた凧音やったのか」

凧音「おはジョン、良いじゃん別にお姫様抱っこの何が悪い」

ジョン「まあ、良いんだけどよ廊下で鼻血出しすぎて倒れてる奴とかどうすんだよ」

凧音「ちゃんと保健室まで連れていくけど?」

ジョン「あ、先に美紀と圭は連れてったから」

薫男「何であいつらまで倒れるんだよ、部室でよつぽどやばいことやってるだろ」

そう薫男が言った瞬間教室が凍りつく

学園生活部って一体ナニの活動してるんですかねえ…

とか

絶対に

【自主規制】とか

【自主規制】とかえげつない事に決まってるじゃ

ない！

とか

絶対に薫×卓でしょう!? いや、卓×薫男よ！

といった声上がる。

ってなんか最後おかしくね!?

両方彼女居るから！

ヒワインド「はいはい、騒がしいですよー」

女子生徒「あつ！アイエフ先生！」

ヒワインド「因みに俺が学園生活部の顧問だが学園生活部は至って普通だぞ」

男子生徒「え、そうなんですか？」

ヒワインド「そうだぞー、学園の施設を使って、学園に寝泊まりする部活動ではあるが、しっかりと規則もあるし、学園に対して貢献もしてるんだぞ」

ヒワインド「佐倉先生が副顧問なんだから間違いない。」

女子生徒（やっぱりヒワインド生徒はめぐねえを鼻屑にしているのよねー）

男子生徒（左薬指に指輪はめてるから確定でしょうに…）

慈「はーい、それじゃあ、この前の小テスト返すわねー」

薫男「うげっ!？」

由紀「はうっ!？」

そう、このコンビは何故か知らんが勉強が苦手なのだ

慈「掛名沢君、よく出来てるわね」

凜音「いえ、佐倉先生の教え方のお陰です」

慈「あら、ありがとう」

凜音「後でヒワインド先生にも言っておきますよ（ボソツ）」

慈「んもう！（小声）」

そんなめぐねえの左薬指にはヒワインドと同じデザインの指輪がはめられている。

そんな、ありえそうでありえなかった。

【さばげーがえり】のお話

救えなかった及び出せなかったキャラあと、勝手に作ったキャラ

救う設定にできなかったキャラ

その1

柚村さん（チョーカーさん）

理由

だって、原作沿いにしてたから。（原作にチョーカーさんは出てきません）

その2

太郎丸

理由

ただ単純に忘れてた。あと、原作だと最初から感染しててめぐねえが始末した設定

その3

わんわん放送局のお姉さん

理由

名前すら原作で設定のない上にちよつと出てきて意味不明に感染してたからどう救えと？

その4

神山先生（英語の先生）

理由

原作には出てこないのと、オリ主達が到着する頃には時間的に手遅れと判断したため

その5

先輩

理由

シーンをカットしただけでちゃんと（？）胡桃ちゃんが殺ってます。あとは、神山先生と被る設定のため省略

出せ（て）ないキャラ

その1

モールの映画館でスタンバってたゾンビさんたち

理由

危機察知能力の高いキャラがいたせい。

その2

大学編で登場する皆さん

理由

武闘派射殺不可避という原作の展開だった為。(主にコウガミのせい)

その3

へりの人

理由

めぐねえ生存及び、学園さばげー部の結成によって【わたしたちはここにいます】手紙を出さなかった為。

その4

るーちゃん

理由

悠里の精神状態安定、及び屋上菜園が残っている為

その5

モールで生活してた頃のリーダーとか

理由

シーンカットしただけでちゃんと（？）燃えた
あと、ジョンが登場する事により圭の精神状態安定（？）
の為回想されることがなかった。

勝手に作ったキャラ

ランダルの研究員A、B

まさにB級映画の悪役位の悪役。火炎瓶で焼かれる

ランダルの研究員C

まさにうろたえる悪の組織のモブ。凜音にKTRで射殺される

ランダルの研究員DとG

怯える研究員、B級映画の悪の組織のモブたち、「助けてくれー!」「まだ死にたくないー!」とかテンプレなセリフを言うキャラ

ヒワインドにM60で瞬く間に「ミンチよりひでえや」にされた。

ランダルの研究員HとZ

説明は→と同じ、薫男にAA12で粉微塵にされた。

ランダルの親玉

出会うなり凜音に「膝に7.62mmを受けてしまったな…」にされた。散々情報を吐かせて証言をとった後、ゾンビの群れに放り込まれ、ゾンビに食われながら射殺され

た。

織叢秋斗

平行世界の学園生活部からやってきた元超絶チート主人公。身体能力の方面がかなり弱体化してる。

ただし兵器とかを出すのは変わらない。ただし、扱えなくなってるので出さない。

ただし救急キットと最凶AED、∞弾薬箱は健在なのでうちの主人公ズと組んでやばい事になってる。因みに平行世界の一つの可能性なので、この秋斗君は悠里と依存する前の為、悠里と凜音がベタバタしていることには何も感じてない模様。
むしろこつちの生活部のはなんでもありかと驚いてる。

えいぶりるふーる

諸君はエイプリルフールという日を知っているだろうか？まあ、最近の人で知らない人の方が少ないだろうが一応説明しておく、嘘についても許されやすい日だ

そんな日の学園サバゲー部の1日である

凜音「ミスった……」

悠里「どうしたの!!？」

凜音「……えだったんだ……」

悠里「え？」

凜音「……めぐねえ……だったんだ……」

と言う茶番を凜音と悠里が繰り広げ、

薫男「最期まで……皆の希望で……良かった……」

由紀「ばいばい……ゆきに……」

という小芝居を薫男と由紀が行い

ジョン「生きていればそれでいいのか？」

美紀「ねえ、待ってよ。」

ジョン「……大丈夫、すぐに助けを呼んでくるから……それまで S I G P 2 2 6 預
かっててよ」

美紀「ジョン……私……」

ジョン「解ってる……ちゃんとその子と一緒に迎えに来るから」
と言ったふう^にに圭と美紀が入れ替わりで役を回してみたり

ヒワインド「めぐねえ……俺は……」

めぐねえ「うん、解ってるわ……貴方との証……ちゃんと紡いでいくから……一緒に大切に
育てようね」

ヒワインド「ありがとう…めぐねえ」

という冗談に聞こえない会話をしてたり

正直カオス以外の何ものでもない一日になっていた。

1 番冗談に聞こえなかったのが、ヒワインドがめぐねえを妊娠させたという冗談だった。

以下投稿者の嘆き&今後の投稿について

ぶつちやけて言えばもうめぐねえ孕ませちやつてもいいんじや無かろうか（唐突なR
18展開）

そろそろ新約の方も更新しなくちやだし、ACの小説もISの小説もモンハンの小説
も書かなきゃいけない（唐突な投稿者の嘆き）

最近出したISの方がこの作品よりも人気で正直戸惑ってる（メタ発言）

ごちうさのR18はキャラの誕生日ックスを忘れたせいでやる気が9割削がれたん
だ許してくれ

え？いずれはごちうさの方の小説でも孕ませるつもりですが何か？

新約のエロいことは更新しないとそういう展開に行けないから無理

だって無理矢理するの嫌いつて言うか苦手

それにオリキャラ達の性格的に無理矢理なんてできないダルお!!?

はあ…すつきりしましたー

という訳でこれからは更新頑張る……でも流石に毎日投稿とかは無理…：時間がある時に纏めて更新します…

なので、気長に待ってけると嬉しいですよ。ええ、後、コジ饅頭様とのコラボ編も

続けていききたいと思っておりますので何卒よろしくお願いします！

以下意見を聞きたいです。

新約の方をR15に下げて番外編的な感じで情事を書くのがいいのかそれともこのままストーリー進行途中途中にエロシーン描写した方がいいか悩んでいます…

星に願いを

七夕それは一年に一度織姫と彦星が出会える日……なのだが

凜音「一年に一度しか愛してやまない人と会えないとかどんな拷問？というかただのキチガイでしょ。考えた奴は頭おかC」

薫男「いきなりどうした凜音、そして口調がおかしなことになってるぞ」

由紀「えー！ゆつきーは解ってないなあ、もし私と一年に一度しか会えなくなったらどうするの？」

薫男「それはやり場の無い怒りから」

ヒワインド「盗んだバイクで…？」

薫男「ジョンを殴り出す」

ジョン「お願いだから絶対やめて
!!!!」

卓「そういえばさあ、なんで七夕って、短冊に願いを書くんだろうね？子供の頃とか
気づいたら書いてなかった？」

薫男「あー…俺は書いてなかった気がするな…」

ヒワインド「いや、書いてたよ？」

薫男「マジで!?!」

ヒワインド「うん、M134が欲しいって書いてた」

凜音「そのお願いは無理じゃないかな？」

由紀「でも七夕きつと楽しいよ？皆で短冊にお願いごと書くの!!」

薫男「よし来た、笹を取ってこよう!!」

凜音（わあお……熱い手のひら返し……由紀が絡むと薫男はすぐこれだもんな……自覚あるかは知らんが……）

悠里「私もお願いごとはあるんだけど……その……」

凜音「そのお願いごと叶えたいな……よし、行ってくるか」

ジョン（凜音はきつと薫男のこと言えないと思うの…）

そしてこの時、お願いごとで去年のクリスマスパーティーの悪夢が蘇るヒワインド

回想——

『ヒワインドくん!!私プレゼント欲しいわ!!』

『めぐねえ…?酔ってる?酔ってるよね?取り敢えず何が欲しいの?』

『ヒワインドくんとの子ども』
『ヴェアアアアアアアアア!?（バターン!ヒワインドがぶつ倒れる音）』

回想終了——

めぐねえ「あら？皆どうしたの？」

凜音「あ、めぐねえ、かくかくしかじか」

めぐねえ「なるほどね、良いんじゃないかしら？笹ならその辺に生えてるだろうし」

凜音「という訳で取ってきました。」

めぐねえ「早い!!」

凜音「ちよつと本気を出しました☆」

ジョン「縮地の無駄遣いやめーや……」

凜音「悠里の為に使う縮地には無駄がないから良いの」

ジョン「……イカレてるよ……お前」

凜音「その何が悪い？」

胡桃（卓と恋人になれます様に……あわよくばそういう事ができますように……）

卓「？胡桃ちゃん？」

胡桃「ひょうわ!!／／／」

卓「どしたの？」

胡桃「ななななな…／／何でもないッ!!／／」

胡桃（卓本人に言えるわけないだろう…だって…卓が大好きで…卓に【自主規制】なこととして欲しいって考えてたなんて!!／／／）

圭「なんか女の子として胡桃先輩に負けてる気がしてきた……」

美紀「圭?どうしたの?」

圭「美紀……今日は7月7日、なんの日?」

美紀「え?それは七夕でしょう?」

圭「そう!!そして七夕といえはお願いごと!!そのお願いごとに好きなように人に思いを伝えたいって……乙女過ぎてツ!!負けてる……私達負けてるよお……」

美紀「いや……いきなりそうは言われてもね……」

圭「そういう訳で……今から百合ろう……美紀(錯乱)」

美紀「意味がわからないよー!!」

凜音「ねえ、悠里のお願いごとって何だったの？」

ふと、凜音は気になって悠里に尋ねる

悠里は頬を赤らめながら、こう答えた。

悠里「皆でこれからも無事に過ごせますように……それから………がほしい………つて」

最後の方は殆ど聞こえなかったが、凜音はどうか解った。

凜音「………そうだね…叶えたいね…そんな日が来るといいね…悠里」

凜音はそう言い。悠里を抱き寄せる

悠里「そうね……将来のアナタ……」

コラボ ゾンビ蔓延る学校をFPSプレイヤーが被害を悪化させる話？

ゾンビ蔓延る学校をFPSプレイヤーg…いいえ、これはさばげーがえりです

秋斗「えっ（困惑）」

学校から学校に飛ばされた。何を言ってるかわからんと思うが俺も訳が分からない

秋斗「やっぱ…武装して…ってレクテイルとかが出ねえ!? くっ…いつも以上に武装が重く感じる…だが学校の中割と綺麗だな…? しかもゾンビ居ないんだけど…?」

いつもの様に武装を出してと思ったが銃火器しか実体化できない。幸いAEDと弾薬箱は出せるが他は無理の様だ

秋斗「くっそ…MG4が重く感じる…」

それはそうだ。今まではしがないFPSプレイヤーだったのだ。

秋斗「それにしてもゾンビは居ないし割と綺麗な学校だな…窓は割れてるけど…」

秋斗「……………なんか見たことあるような…無いような内装だなあ…」

当然同じ巡ヶ丘学院高校なのだが自分は爆発物を大量に使ってボロボロにしたので
面影／Zeroなのだ。

そんな事を考えているとゾンビが2体程出てくる。

秋人「やれやれ…」

そしてMG4でゾンビを狙いトリガーを引く

秋斗「うわっ……！」

だがいつもの様に上手く反動制御ができない。
その為胴体を狙ったというのに腕に当る

秋斗（どうする…MG4じゃなくUMP45を呼び出してか…？）

だが長考している暇は無い。

秋斗「くっ！UMP45！」

UMP45を呼び出した秋人はMG4を投げ捨て、UMP45を構えて発砲する。

秋斗（死なない!?)

確かに頭に穴を開けたのにゾンビは倒れない。今持っているUMP45の弾薬が貫通しすぎたせいで殺しきれない

秋斗「くっそ!!ここまでか!？」

??? 「右に避ける」

秋斗「!!」

その声が聞こえ秋人が右に避けた瞬間ゾンビの頭が弾け飛ぶ

??? 「危なかったな、坊主」

秋斗「あ、助かりました」

薫男「俺の名は白水薫男だ、まだ校舎内に少し残ってたのか。」

薫男はM700を担ぎながら秋人に近づく

秋斗「ええつと俺は秋斗です、織叢秋斗」

薫男「ところで、どこからそのUMP45取り出した？最初の発砲音はUMP45じゃなくMG4だった筈だが？」

秋斗「 (!! ? 銃声だけで銃を当てた ! ?)」

薫男「なぜ分かったって顔してるな、まあそんなことはどうでもいい、とりあえずついてこい。部屋まで案内してやろう」

秋斗「あっはい」

薫男「戻ったぞ、こいつが銃声の発生源だ」

秋斗「織叢秋斗です。」

凜音「え、ゾンビ蔓延る学校をFPSプレイヤーが（以下略の主人公!?!）」

ヒワインド「知っているのか！雷電」

凜音「BFやってたら学校に飛ばされたチート能力主人公やん！」

秋斗「えつと…：残念な事に弱体化してる…：何故か」

凜音「そつかあ…：弾薬補給できるかと思っただけど…」

秋斗「弾薬箱位なら出せますよ！」

一同「マジで!!?」

こうしてサバゲーマーと学園生活部とFPSプレイヤーの意☆味☆不☆明な学校生活が始まる

コラボ2話 ゾンビ蔓延る？さばげーがえり!?

凜音「気付いたらこっちの学校に居て能力が弱体化していたと？」

秋斗「まあ、そうなるな」

ジョン「せっかくだから俺にメインアームをくれ！ハンドガン2丁辛い」

秋斗「P90で良い？」

ジョン「やったあああああああああああああ！」

秋斗「うおっ!?急に叫ぶなうるさい！」

美紀「すみません、うちのジョンがうるさくて…」

悠里「あらあら」

薫男「で、だこつちの学園生活部はどうだ?」

秋斗「すごく…甘々です…(白目)なんでこんなにも甘ったるい空間なんだよ…」

まあ、慣れてない秋斗からすれば仕方ないが由紀は薫男にずっとべったで膝の上だったり、美紀と圭はいつの間にかジョンの両サイドに引っ付いてたし、悠里と凜音は健全なだいいしゆきホールだももうやだこの生活部…

え?めぐねえとヒワインドはどうしたって?言わせんな恥ずかしい

秋斗「ええつと…多分弾薬箱とか最強AEDとかは使えるから役立つと思うんだけど」

凜音「そうと決まれば入部決定かな?ようこそ!さばげー生活部へ!!」

まあ、なんやかんやで秋斗の歓迎会が開かれるのだが：

秋斗「」

薫男「どうした？こっちの飲み物が良かったか？」

そう言いながら世界一アルコール度の高い酒を秋斗の前に突き出す薫男

秋斗「遠慮する：俺は未成年だし、消毒液よりアルコール度の高い酒とか飲み物じゃないだろ：」

凜音「大丈夫か？主人公」

秋斗「いや…流石にあんなに見せつけられたらグロッキーになるぞ…ジョンに対してあの2人はツンデレなのか…?」

凜音「正確にはヤンデレだ」

秋斗「マジかよお…」

ヒワインド「あ、玉藻の○当たった」

秋斗「待って!なんでFG○やってんの!?!」

凜音「??なんで??」

秋斗「電波とかどうなってんの!?!」

薫男「知ら管」

秋斗「ええ……（困惑）」

こつちの世界はだいぶイージーモードらしい

ヒワインド「でももう宝具レベルmaxなんだよなあ……」

薫男「特殊召喚に使えばいい」

ヒワインド「でも2体目を育てるのもありか……」

秋斗「なしだろ!!」

凜音「あ、悠里どうしたのー?」

悠里「えつとね、これを彼に」

凜音「ああ、そういう」

悠里はそう言いながら嫁セイバーの衣装を着た由紀を預けてくる

凜音「薫男ーほれ、薫男のサーヴァントだ」

薫男「由紀!!何故ネロの服を!!」

悠里「因みに私はブリュンヒルデの格好なのだけれど…」

凜音「…ちよつと席外すから卓君秋斗の相手よろしく。」

そう言うと凜音はブリュンヒルデの衣装を着た悠里をお姫様抱っこしてそのまま寝

室へGO!した。

秋斗「あっ…。(察し)」

ヒワインド「すまない、本当にすまない」

秋斗「まあ、良いや…」

胡桃「私はいつも出番が少ないなあ…もうちよつとシャベル道に磨きをかけるか…」

秋斗「胡桃がメタい!?!」

卓「大丈夫だいつもの事」

秋斗「ええ…。(困惑)」

薫男「さつきから思ってたが秋斗は淫夢民なのか？」

秋斗「淫夢民でありレイヴンでありリンクスであり（以下略）」

因みに次の日悠里と凜音は揃って寝坊して起きてきたとかなんとか…

由紀と薫男はどうしたって？言わせんな恥ずかしい。

コラボ第3話 ゾンビ蔓延るさばげーがえり

秋斗「そういえば気になってたんだけど」

凜音「どうした？」

秋斗「何でPS3とPS4があるの？」

薫男「ああ、買物（100%OFF）で買ってきた」

秋斗「わぁお……」

凜音「ACあるけどやる？」

秋斗「やるー!!」

凜音「遅かったじゃないか」

秋斗「大きすぎる修正が必要だ…」

薫男「貴様、リンクスを名乗るなよ」

めぐねえ「もう二年前か、私がお前を撃つたのは」

胡桃「お前……お前が……私をつ!!」

由紀「黒い鳥…そんなものはただの妄言に過ぎない」

圭&美紀「世に平穩のあらんことを」

ジョン「こ……来いよ……あ……穴だらけにしてやる……！」

卓「まあやるんなら本気でやろうか！そっちのほうが楽しいだろ!?ハハハッ!!」

ヒワインド「……単純バカが……」

凜音「まだだ……まだ俺は戦える…此処が！この戦場が！俺の魂の場所だ!!」

秋斗「馬鹿な!!再起動だ?!」

凜音「うおおおおおお！」

秋斗「馬鹿な…こんなことが…」

秋斗「とでも、言うと思ったかい？この程度想の範囲内だよお！」

凜音「だが、それでも…勝ったのは俺達だ！」

秋斗「何っ?!?グラインドブレード…だとお!!?」

【Break down】

悠里「何してるの？いや、皆もだけど…」

凜音「あ、悠里何って…そりゃあ…アーマードコオア（イケヴォ）だよ」

薫男「まるでファルスだな」

ヒワインド「これがファンタズマだ!!」

めぐねえ「戦いはいい。私にはそれが必要なんだ」

由紀「なんでも構わないよ？滅茶苦茶にしてくれれば!!」

悠里「というか、皆その声どこから出してるの!?特にめぐねえと由紀ちゃん!!」

胡桃「ここたま!」

悠里「ここたまって何!!？」

由紀「ブルーマグノリア…伝説の女傭兵…」

めぐねえ「ンツッフ…（・8・）」

悠里「おかしいよ…めぐねえもう由紀ちゃんももつと可愛い声だったのに…」

圭「大いなる者が我らを見ている…負けるはずが無い…」

美紀「このエンブレムこそ、その証…!」

悠里「圭ちゃんは男の人の声だけど美紀さんは女の子の声!!でもなんか怪しい感じがする!!」

ジョン「世に平穩のあらんことを」

悠里「感染した!!」

秋斗「ビーハイヴは感染するんや…」

凜音「結構声真似みんな上手いなー…めぐねえと由紀なんて本人レベルで上手かったよ」

由紀「ふっふっふ…練習頑張ったからね!」

めぐねえ「良かったあくちやんと似せられて」

悠里「もう声真似ってレベルじゃないと思うの…」

秋斗「仕方ないね……大体フロム脳の人は無駄に技術力が高いから……」

ジョン「何で俺はあのキャラの真似なんだよ」

圭&美紀「一番似てたから」

ジョン「／（＾o＾）＼ナンテコッタ」

第2章 卒業旅行

第17話 そつぎようしき

凜音「ふむ……」

凜音は由紀の持っていた地図帳と自分たちの住んでいた地図を見比べる

慈「凜音くんどうしたの？」

凜音「あ、めぐねえ ちよつと考え事を…」

慈「考え事って？」

凜音「この世界についてです。」

慈「っ！」

凜音「俺たちは明らかに違う世界に來たと考えるのが妥当でしょう。科学的にはありえませんが……」

凜音「地図が一致しないんです」

慈「どういうこと？」

凜音「俺たちがここに来る前に車で走っていたのがここです。そしてこことは3万km以上離れているんです」

慈「……」

凜音「そして俺たちの地図には巡ヶ丘と言う土地は無いんです。」

慈「ということは……」

凜音「俺たちの来た地域まで行ってみましょう」

慈「でも…電気なんかは…」

凜音「もし電気類が生きていなかったらここに帰ってきましょう。」

そしてその計画を話してから1週間後

薫男「さて、準備できたか？」

由紀「おっけーだよ！」

慈「はい、じゃあそろったかしら？」

凛音「それでは、私立巡ヶ丘学院高校の卒業式を執り行います。先生のお言葉佐倉慈先生」

慈「みなさん、おはようございます。」

学園生活部「おはようございます。」

慈「今まで、沢山の出来事があり、絶望し、諦めかけた時もあったでしょう。ですが、これからはもう大丈夫です。絶望に押し潰されそうな時も、隣に寄り添ってくれる人との出会い、希望が生まれたでしょう。これからも巡ヶ丘学院高校を卒業したことを誇りにこれからも歩んで行きましょう。」

ヒワインド「佐倉先生、ありがとうございました。続いて、在校生兼卒業生の送辞代表、直樹美紀」

美紀「はい」

美紀「送辞 月日の流れは本当に早いもので、出会ったと思ったら、もう卒業の季節なのでですね。先輩達との出逢いは本当にかげがえの無いものでした。」

在校生兼卒業生代表 直樹美紀」

薫男「ありがとうございました。続いて、答辞 卒業生代表 丈槍由紀」

由紀「はい！」

由紀「私達にとって、屋外活動生活部？サバイバルゲーム部？」

薫男「サバゲー部でいいよ。」

由紀「えへへ……ごみい……サバゲー部のみんなとの出会いは大切なものでした。私達、私立巡ヶ丘学院高校の生徒一同はサバゲー部のみんなに救われました。これからも迷惑掛けちゃうかもしれないけど、ずっと一緒に居ましょう……卒業生代表……丈槍由紀……っ！」

巡り巡るアルバムのページ、ひとつひとつ、宝物だよ思い出を抱き締め今一緒に果てない未来へと……

凜音（大号泣）

薫男（顔を隠している）

ヒワインド（目が潤んでいる）

卓（涙が伝う）

ジョン（大号泣）

サバゲー部一同「これからもずっと守らせていただきます！」

凛音「積めるものは積めるだけつんだね」

薫男「よし、出発だ！」

全員「おー！」

第18話 たびだち

凜音「はあ……」

薫男「どうした？」

凜音「弾薬の補充をどうしようか考えてて……」

卓「あ……」

そう、弾薬の消費は死活問題だった。最初は5000発以上あったが今では半分を切っている

特にシヨットシエルの消費が激しく、4分の1程になっていた

……主にAA12のせいだが

凜音「はあ……前読んでた、あるがっこうぐらしの二次創作の主人公の如くバトル
○イールドとかレイン○ーシックスの装備出せる能力有ればなー。」

薫男「なにそれ超欲しい。」

卓「レイン○ーシックスの装備かー…良いな」

ヒワインド「できればC○○も欲しいなー」

ジョン「何その小説読みたい」

結局、近接武器を調達する事になったのだが…

凜音「お、この民家に日本刀置いてあった！」

ジョン「!?」

ヒワインド「刀使える人ー」

薫男 力任せにしか振れないので折れる（確信）

ヒワインド M60 装備だから持てない

卓 鞆への納め方知らない

ジョン ナイフの方が好き

ジョン「……凜音よろしく」

凜音「マジでいいのか……」

ついでに補足しておく、手入れ道具一式もあつたので一緒に持ってきた

悠里「すごい……まるでアニメの主人公みたい……」

由紀「うん！なんかりーくんにしつくり来てる！」

胡桃「だな」

凜音日本刀（打刀）入手

続いて、ある洋風の家

ヒワインド「バトルアックスとかあったぞ」

薫男「俺だな…」

薫男バトルアックス入手

続いて、キャンプ用品店

圭「ジョン、こっちきてー!」

ジョン「!!何があった!」

圭「これ!」

ジョン「何故……キャンプ用品店にM9バヨネットナイフが……？」

ジョン M9バヨネット入手

ミリタリーショップにて

ヒワインド「……」

慈「あら？ヒワインドくん？どうしたの？」

ヒワインド「マチエーテにするか鉈にするか……」

慈「うーん……両方というのは？」

ヒワインド「その手があった」

ヒワインドマチエーテ&鉈入手

卓「俺どうしよ…」

胡桃「な、なあこれとかカツコよくないか!？」

キラキラした目でスペツナズシャベルを見つめている

卓「決定」

卓 スペツナズシャベル入手

薫男「これはひでえな…」

改めて考えると

日本刀 バトルアックス M9バヨネット 鉈 スペツナズシヤベルという
ヤバすぎる近接武器をそれぞれ持っている

凜音「んー…これ位の重さだったら居合できそうだな」

ジョン「やめてくれ。なんか凜音が居合をやったら音速超えた抜刀術みたくなりそう
だ……」

ヒワインド「飛○御剣流かな……?」

薫男「最近そのネタわかる人少なくなってきたなあ…」

ジョン「薫男がメタ発言してる」

悠里「飛○御剣流って何…?」

胡桃「飛○御剣流かあ…シヤベルで出来るかなあ?」

圭「九○龍閃!」

美紀「secret sword II!」

慈「フタ○ノキワミ、アツ!」

由紀「まさに「るろうに○心」だね!」

卓「もうこれ収拾つかないんじや無いかな…」

地の文で説明する必要がほぼないネタである。
フ○エノキワミは伝説なのだ…

車内にて

ジョン「なあ、凜音」

凜音「どうした？」

ジョン「もしさ、俺が圭と美紀のどっちか片方選んだら凜音「悲しみの向こうへまっしぐらだね」

ジョン「……………どうにか凜音「無理だね」

ジョン「……………(; ω ;)」

最近戦闘シーン書いてない(メメタア…)

という訳で戦闘シーン

凜音「悪いけど、試し斬りの藁替わりになってもらうよ！」

凜音は腰に構えた刀をほぼ水平に薙ぐ

ゾンビ「」

見事に胴体が真っ二つになり、血を吹き出し、崩れ落ちる

凜音「そこっ！」

流れるような動きで、袈裟に斬り下ろす

ゾンビ「」

綺麗に胴から袈裟に斬り裂かれ、糸が切れた様に崩れ落ちる。

凜音と、手にした刀には全く返り血は付いていない

薫男「やるねえ」

薫男はそう言いながら、バトルアックスでゾンビを縦に両断すると、その勢いを乗せたまま、遠心力を利用して飛び上がり、大上段から斧を叩きつける

ジョン「だいぶ人間離れしてるなあ…」

ジョンは地味ではあるが、凄まじい戦いぶりだった。

M9バヨネットを逆手に持ち、ヤツらの背後に回り、次々と首を落としていく

まさに、妖怪首おいてけである

ヒワインド「うわお。格闘強い人が羨ましいよ」

ヒワインドはそう言いつつ、左手のマチエーテでヤツが振るってきた腕を止め、右手で手にした鉋で首を落とす。

さながらカウンターの様な形でヤツらを倒していく。

卓「そおら！」

そう気合を入れて卓はスペツナズシャベルを “投げた”

スペツナズシャベルはヤツらに当たると止まると事なく貫いていく。

そして胡桃と二人で駆け抜け、シャベルを回収そして回収と同時に最後の一体を胡桃と同時にシャベルで斬り裂く

悠里「……すごすぎて正直ついていけないわ……」

由紀「ゆつきーすごい！空中で回転してた！」

圭&美紀「ジョンが暗殺者のようだ……」

慈「ヒワインドくんのはちょっとハラハラするわ……」

巡ヶ丘からの移動距離100km

第19話 ま〇どぐらし!

最近、缶詰等の食事が多いせいで温かい食べ物に飢えている時、某有名ハンバーガーチェーン店が目に入った。

薫男「そういえば、凜音ってバイトここだったよな？」

凜音「そうだけど…機械生きてるかなあ…」

ヒワインド「電気ついてるけど？」

ジョン「え」

凜音「……生存者かはたまた過去の記憶だけを頼りに奴らが起動させたか……」

外観からすると、厨房は無事の様だ

胡桃「よし、制圧するか？」

卓「制圧するなら、俺達が行くよ」

凜音「客席の方と駐車場周辺の制圧だな」

ジョン「オツケー、んじや行きますか！」

さばげー生活部戦闘員はそれぞれの武器を手に取り、制圧を開始する。

凜音「無明三〇突！」

ジョン「。ム。」

凜音が対人魔剣をうった事に驚愕するジョンである。

ヒワインド「スターバースト…ストーム!」

ヒワインドがマチェエーテと鉦で16連撃を決めているが誰も突っ込まない。日常だもんネ☆(白目)

卓「良いなー、俺もジ・イ○リップスとか使いたかったなー」

めぐねえ「なんでもありね(白目)」

ヒワインド「流石にジ・イ○リップスはまだ使えないんだよなー」

薫男「テンツェリント○ンペ! 砕け散りやがれエ!(野太い声)」

卓「ゲッター○ヴィーネは使わないの?」

由紀「もう、使うならハードブレイクだよ!」

ジョン「いやいやいや、そういう問題じゃないから、なんでうちの部隊の男どもは人間離れした技をぼんぼん使えんの!？」

凜音「そう言いながら死告天使使うジョンはなんなの？」

ジョン「え？」

圭「もううちの部隊だけで世界壊せそうだよ…」

美紀「由紀先輩の歌だけで1回世界壊せるから…実質2回くらい行けそう（小並感）」

悠里「もう、慣れたわ」

卓「まあ、正直ゾンビ相手にやりすぎだけどね…」

胡桃「制圧終わったなー？」

凜音「よし、俺が作ろう。食べたいバーガーを言うんだ、期間限定商品以外でな」

胡桃 「じゃああたしダブチで」

悠里 「そうねえ…BLBが良いわ」

由紀 「うーん…プチパンケーキ!」

めぐねえ 「えーつと…エビでお願い」

ジョン 「クリスプ5個」

薫男 「ビッグとダブチの欲張りセットで」

美紀 「えーつとチキンで」

圭 「私はエッグ入ってるの!」

凜音「オツケー、1番時間かかるのがめぐねえと美紀で、その次がジョンだからちよい手伝い欲しいな」

悠里「手伝うわ」

凜音「ありがとう、じゃあ、プチパンケーキとあとポテト揚げるの手伝って」

約5分後

凜音「お待たせしましたー、エビバーガーセットでお待ちのお客様」

めぐねえ「ありがとう、すごいわねー本物の人みたい…」

凜音「まあ、元バイト先ですし…」

凜音「よし、おわりー」

悠里「凄いわね、本当に凜音ってなんでも出来るのね」

凜音「…そう? そうでも無いよ。俺だつて入れ忘れしたりしたなあ…あと、お釣りわ
たし忘れちやたり」

久しぶりに温かい食事を楽しむ1行である。

凜音「ふう」

凜音が一息ついて、厨房の方に行ったときである。

悠里「ねえ……」

凜音「ん? どうしたのゆう……り?」

悠里「ちよつと…シたくなつちやつた…♡最近ご無沙汰だったじゃない…? だから

……ね?♡」

凜音「くっツ!」

キング・クリムゾン!

由紀「ねえねえ、ゆっきー!二階もあるよ!二階行こー!」

薫男「お、良いぜ」

由紀 つサーツ (迫真) へ薫男の飲物

薫男「ふう、ちよつと食べたたら眠たくなつたなあ…10分くらいしたら起こしてくれー」

由紀「うん、皆に伝えてくるよ!」

薫男（☒ω☒）スヤア…

由紀「ふっふっふ…計画どおり」

この後由紀ちゃんはツヤって車に戻るがそれは別のお話

今回はここまで!

第20話　メインヒロインの4人中3人が○ナニーする
ゲームがあるらしい

薫男「……………」

凜音「正直に言っ、状況は？」

薫男「宜しくないね、なんたって消耗が激しい。特にコイツが」

ヒワインド「これからAA12に頼るのは頂けないな……………」

凜音「でも俺のM870を分けるのは？」

ジョン「それは凜音の使える武装が減るだけじゃ？」

凜音「でも12ゲージのやりくりだったら仕方ないんじゃない？」

薫男「良いのか？凜音？」

凜音「構わないよ、まだKTRに余裕があるし」

薫男「それを言うなら俺もM700が…」

凜音「M700は遠距離からじゃないと辛いでしょ？その点A Aなら大丈夫でしょ？」

薫男「そこまで言うならありがたく使わせてもらおう。」

凜音「あと、M60は大丈夫？」

「よ
ヒワインド「何とかね、基本的にセミオートでしか撃ってなかったから、余裕がある」

ジョン「流石、ダンボールをマガジンにできる銃」

薫男「ジョンは？」

ジョン「最近ナイフしか振ってねえ、弾がないわけじゃねえけど、ナイフのが静かに素早く殺れるから」

凜音「なんか最近刀しか使ってないような気もするんだよね、俺も」

ヒワインド、卓、薫男「……………」

凜音「な……………何？」

ヒワインド「いやね、凜音が刀を使ってるのを見るとね…」

卓 「なんというか……」

薫男 「刀の概念が壊れる」

凜音 「そんなに変な使い方してる？」

薫男 「変なつつうか……」

ヒワインド 「最早あれはチートだよね……」

凜音 「……？……どこが？」

一同「全部!!」

回想

凜音「まずいね……」

薫男「くそ……こんな所じゃ発砲できねえしな……」

ジョン「ちいッ……ナイフが振りにくい……」

ヒワインド「流石にこれはまいるね」

凜音「……ちよつと下がってて、」

薫男「おい、凜音!!」

凜音「良いから!」

凜音は刀を鞘に収め、水平に構え

凜音「……神をも超える力……受けるがいい!!」

次の瞬間、凜音が目の前から“消えた”

そして何が起こったのか次々に切り刻まれていく眼の前のゾンビ達

凜音「今!!」

刀を上段に構えそこから思い切り振り下ろす。

と、先にゾンビ達が切り刻まれて、その後に聞こえる刀を振るった音

凜音「何とか減らしたから、よろ……しく……」

ほぼゾンビを壊滅させ、戻ってくるなり、凜音は倒れる

回想終了

薫男「あれはマジで心配したんだからな!？」

凜音「アハハ…まさか自分でもできるとは…次元斬・絶擬と名付けよう」

ヒワインド「まあ、何となくそれだろうと思ってたけど…二つ目のは何？」

凜音「?ただ音素で唐竹割をして前方にソニックブームを発生させて切り刻んだだけ
だけど……?」

一同「それは普通の人間にはできないから!!」

凜音「鍛えれば…」

一同「多分むり!!」

凜音「俺からすると薫男も充分意味わからないけど?」

薫男「どこが？」

回想

薫男「ふんツ!!」

薫男はバトルアックスをまずは下から斬りあげ、そのまま飛び空中でハンドガンを抜き、

回転しながら次々とゾンビをヘッドショットしていく

そして着地と同時にハンドガンホルスターに収め

アックスを横薙ぎに振るい、ゾンビの足を吹き飛ばし、その勢いのまま上段からアックスを叩きつけ、首を落とす

回想終了

薫男「どこもおかしい所は無い」

凜音「嘘つけ!!」

ヒワインド「言われてみれば…」

卓「いや、ヒワインドも人の事は言えないと思うんだけど…」

ヒワインド「いやいやいや、俺は一般人」

ジョン「逸般人だね」

回想

ヒワインド「ツ!!しまっ……」

ヒワインドは手にしたマチエーテでゾンビの腕を切り落とせず弾かれ、取り落としてしまう

薫男「ツ……!!ヒワインドオ!!」

薫男が叫ぶが早いか

ゾンビの首が飛ぶ

ヒワインド「練習してて良かった…」

ヒワインドは右手のマチェーテを取り落としてしまった時のために左手の鉞で流し斬りをできるよう凜音と練習していたのだ

凜音「流石…俺でも実戦で使えるようになるの苦労したんだけどな…」

ヒワインド「まあ、俺のはまだ訓練でどうにかできるでしょ?」

凜音「そう…だね?」

ジョン「何もおかしい所は…きつと無い」

卓「うーん…最近胡桃ちゃんがね…」

凜音「どうしたの？」

卓「夜になるとなんか俺の名前を呼んでる気がするんだけど…それについて聞いても慌てて否定されちゃうんだよね…」

凜音「……………どう思う？」

薫男「……確実にアイル〇ーツのヒロイン？」

ヒワインド「〇ナニーをアイル〇ーツって言うの辞めてあげて」

凜音「……だつて…ねえ…？」

薫男「でもたまたまに俺も聞くぞ？ 由紀がアイル〇ーツしてるの」

ヒワインド「薫男もかい!!」

凜音「うーん……悠里はそういうの隠すの下手だからね…声は聞いたこと無いけどすぐわかる」

ヒワインド「ええ…（困惑）」

ジョン「……………（あの二人の場合は百合でもあるから何も言えん）」

凜音「やっぱりこの生活部アイルーツ多くない？」

ヒワインド（えーつと元のアイルーツは4人中3人で、こっちは6人中5人…かな？）

ヒワインド「やっぱり天色？アイルーツじゃないか!!」

第21話 オ○ニーする女の子は可愛いって言うお話

凜音へ最近思ってることを言っても良いかな？

悠里へなあに？凜音？

凜音へ我が学園サバゲー部はよく夜戦（意味深）を行うわけではないですか

悠里へいきなり飛ばしてきたわね……

凜音へこれは割と真面目な話だ、夜戦（意味深）をすることを否定はしないさ、だが万が一にも直撃（意味深）してしまったらどうしようという問題があるわけだ。当然下ろすなんて選択は無いし、産む事になるだろうが、産婦人科の心得なんて俺には無いし、当然他の部員にも無いわけだ。

悠里へ………

凜音へというわけでですね、避妊具って大切じゃないですか

悠里へそうね

凜音へどこの誰ですか!? 1夜で半箱も使ったの!!? 確かに相当お互い溜まってたんだなってわかるけどね!! 1晩で半箱はやりすぎだって話!!

胡桃&卓（正座させられている）

凜音へ俺は別にやるなって言ってる訳じゃないの、節度をもっと持つてって言いたい
の、分かる!?

悠里へ凜音も激しい時は相当……

凜音へ悠里………? 後で悠里が綾地寧々してる所の音声バラすよ?

悠里へやめてください!!

凜音へそれに激しいって言ったって半箱も使わないでしょうに……せいぜい1/4だ

薫男（明らかに多いのだろうが俺も凜音の事は何も言えない……）

ヒワインド（ごめん、最近危なく直撃させるところだった）

ジョン（あの二人はゆりゆりしだすからきつと大丈夫だ……うん）

凜音へというわけでですね？ドラッグストアに遠征しなきゃなわけですよ。ドラッグストアへの遠征がどれだけ危険か……はあ……ゾンビ相手ならまだしも生存者相手にしないといけない恐怖……

卓&胡桃へ本当に申し訳ございません……

凜音へまあ……ね、漸く両思いつてわかってお互い爆発しちゃったのはわかるよ、直撃させなかっただけ偉いよ、そこは褒め称える。だから今回のドラッグストアで必要なもののは分かるよね？

一同へイエス!!サー!!

ジョンへというわけでドラッグストアに着きました。

卓へジョンは誰に向かって話してるの？

ジョンへ画面の向こうの読者さんにだよ!!

凛音へメタいので血祭りに上げてやる……(ブロリー風)

ジョンへ(OMG;) ウワアアアアアアアアアアアアアアアア!!!

由紀へねえ、早く行こ? ゆっつきー

薫男へ行くぜえ!! (斧を抜きながら)

凜音へさて……余計な物は斬らない様にしないとね……(抜刀する)

卓へ皆と胡桃の為に頑張るぞー

ジョンへおー!!

ヒワインドへイクゾー

慈へデッデッデッデ

みーくんへカーン

圭へカーンが入ってる+114514点

悠里へなんだこれは……たまげたなあ……

第22話 薬局といえばツ〇ハドラッグか薬〇堂

凜音へあー……ヤダヤダ……いつつも思うけどほんとに映画かなにかみたいなの壊れかたするのなんなんだろうね？

(血液が壁や硝子に着いた店内に入る)

ヒワインドへ偶によくある事じゃないかな？

薫男へなるべく音は立てないようにした方が良さそうだな……奥の従業員の休憩所からも出てきかねない

卓へちよつと今回はキツくなるかもよ？(ドアには防犯用のセンサーが付いており、なにか靴などがぶつかっても音が鳴る仕組みだ)

ジョンへうへえ……止める場所も分からんからな……

一織へいや、なり続けるタイプじゃなく物がぶつかったりしても鳴るタイプだからぶ

つかついたら全速力で車に戻るか

美紀へ分かりました。

圭へそれに、広いショッピングモールと違って曲がり角が怖いね……

由紀へ購買を思い出すね……

悠里へ取り敢えず、その時してたみたいにしましょう？

一織（悪いな、成仏してくれよ）

刀をヤツらの背後から突き刺し、そのまま切り裂く

ジョンへこっちか……？

薫男へすまんが分からん……

由紀へあつちじゃないかな？（食い気味でしかも合っている）

慈（由紀ちゃんが食い気味……）

美紀（相当きてますね……アレは……）

胡桃へ由紀、気を付けろよ？

由紀へ解ってるよ、胡桃ちゃんは心配性だなあ

胡桃へそりやあ心配位はするだろ……

凜音へ……ヤツら少ない……

店内、そして店の周りもヤツらは少なかつた、過去に何者が来た可能性は高い……

薫男へ………凜音、気をつけろ。俺たち以外の生存者の可能性が出てきた

凜音へ………人殺しは流石に遠慮したいけど………相手がその気なら………

薫男へお前が手を汚す必要は無い。俺が殺る………

凜音へいや………今更だったな………俺が人殺しなんてのは………

ふとあの施設を襲撃し、爆破した時の事が脳裏によぎる。

頭に血が登っていたが思考はクールにあいつを殺した。

心と体を切り離して動かすなんて事はできる様になつてた

凜音へ薫男、俺なら大丈夫だ、殺れる。薫男はちゃんと由紀を幸せにしろ

薫男へそのセリフ、そのまま返すぞ。ちゃんと若狭を幸せにしろ。そしてちゃんと事件が起きる前みたいないな日常の幸せを与えてやれ

凜音へ……それは俺たち全員があの子達に与えなきゃいけない事だろ……そのためにこうしてあの学校を出たんだ

薫男へ……そうか……そうだな……

凜音（そうだ……いつかは事件が起きる前と同じ幸せを彼女達に送らせなきゃいけない……学校生活は途中でめちゃくちゃになっちゃってしまった……それに好きな人との結婚や子育てだってちゃんとさせてあげたい……）

凜音（でも今は……）

ふと悠里の笑顔が違う誰かに向くのを想像して胸が苦しくなる

凜音（俺は悠里と一生添い遂げたい……俺じゃないと嫌だっと思って……ああクソっ！！今自分達が置かれてる状況を打開しないとイケないってのに……）

余計な思考を振り払い、ひとまずは目的の物を回収する為警戒しながら進む

凛音（本当に少ないな……ここまで居ないと不気味だ……死体が見当たらないのが特に……だな……）

ジョンへ凛音、止まれ

凛音へっ!?

凛音（ピアノ線か……あつぶな……）

凛音へわりい、助かった。

薫男へピアノ線……無闇に切らない方が良さそうだ……こいつは恐らくピアノ線が切れたら何かしらあるタイプだ

卓へ……引き返す？

ヒワインドへここから他の最寄りの薬局は……

凜音へ……いや、薬局ではないが……手に入る場所はある事にはあるな……来た道をそのまま戻るか？

悠里へ私は賛成よ

慈へええ、他に手に入れる手段があるならそっちにしましょう？

圭へうん、じゃあそれで決まり、今来た道はこっちからだね

美紀へなるべく固まって行動しましょう

由紀へうん、解ったよ。みーくん

薫男（………ピアノ線………今までの道中には無くて何故突然……？恐らくあそこの奥に何かを閉じ込めているか………入られたくないか………だな………もし前者なら………？不味いか

もしれない何か手に負えない物を封じ込めている可能性がある、後者であるなら確実に生存者が居るか居たかのどちらかだ…なら…)

凜音(あのトラップ…:恐らくピアノ線を切ったらブザーがなって奥からヤツらが出てくるタイプの罠…だとしたら…:ってマズい!!?男をあまり立てずのこの人数で素早く車内に戻らないと…:っ!!)

ヒワインドへ皆、音をあまり立てずにできるだけ急いだ方が良いかも。ちよつと悠長に移動してたらマズい事になる

胡桃へそれってどういう…:

次の瞬間ミシリと店の奥の扉が軋む

凜音へ極力音を立てずに早く出て、出口はすぐそこだから

悠里へええ!!

結局全員が出て車に乗り込んだ所で扉が壊れ、店の中に大量のヤツらが解き放たれた

凜音へ危なかったな…

後部座席に乗り込み眩く

あの日の事今でも覚えている。

「学校で放課後に園芸部の部活をしていたら突然あんな事件が起きて……これからどうすれば良いか解らない時に……凜音達がヒーローみたいに来てくれた……最初どうしてって思った……少し前までとても安心して生活していた……でも今は怖い……これからどうなるのかが怖い……」

それに、もしあの時凜音達が来なかったら……？きつと私達は何も出来ずに死んでしまったかもしれない……

怖いよ……凜音……大丈夫だよね……？私達……幸せに……なれるよね……？

いつか私は貴方と……